

報

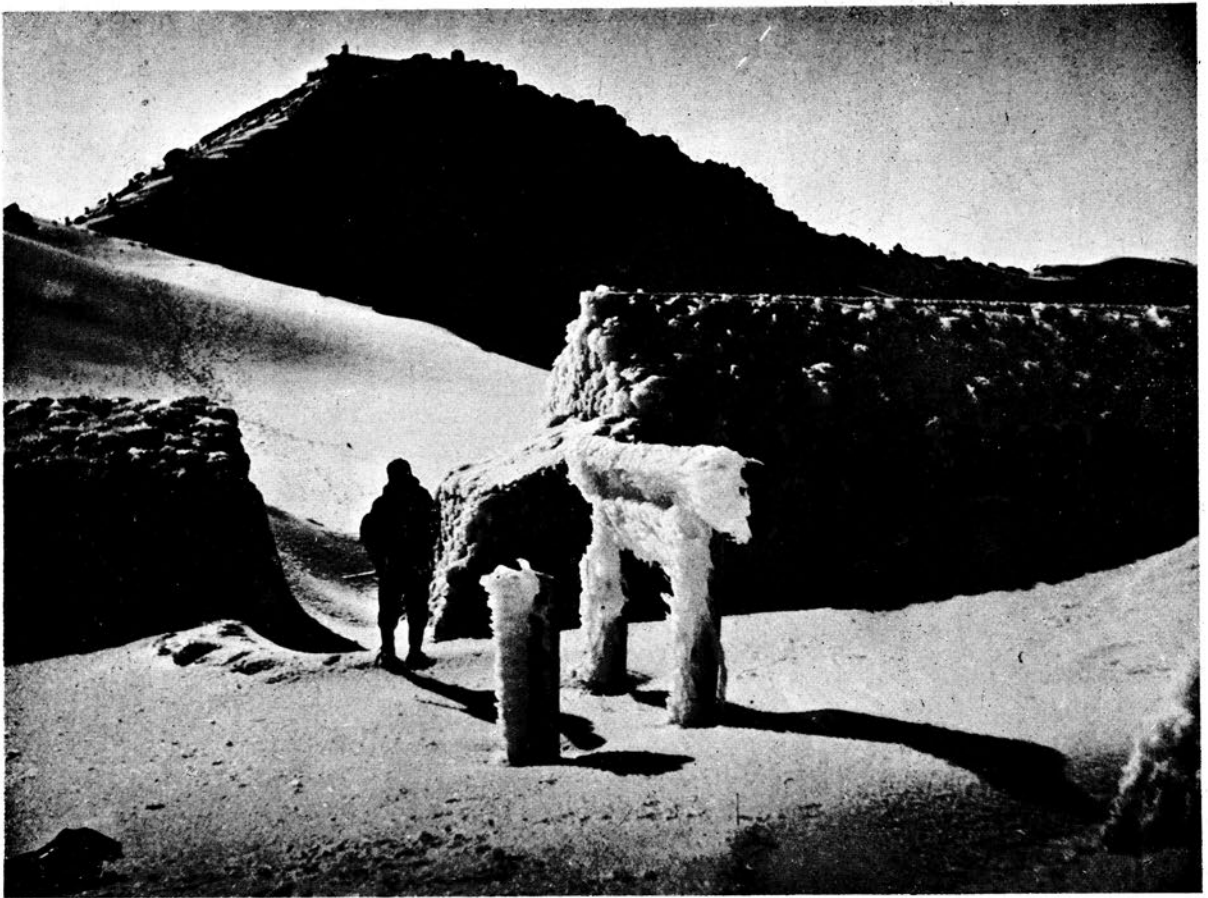


會

昭和十五年十二月

日本山岳會

100



日本山岳會々報第百號記念號

目次

百號の辭

日本山岳聯盟の結成を前にして

時勢と山岳會

登山大衆と其の指導

日本山岳會の行方

ソヴェト一登山家の話

八ヶ岳の東面徑路に就て

内蒙紀行

★ペンケパンケ

★富士の御額

★尾瀬の問題

★秋の神河内より大瀧山へ

忠別岳の雪穴生活

圖書紹介

會員通信 田邊主計・藤島敏男
茨木猪之吉・井上英夫
中村謙

「白樺ヒュッテ」の公開

「山日記」會員二割引のこと

山岳第三十五年第二號内容豫告

會務報告

池山釣尾根より農島岳・十二月

富士山御殿場口頂上より剣ヶ峯觀測所・四月

寫眞

虎ノ門本會々室内部

日本山岳聯盟結成運動經過報告

冠松次郎

額田敏

中村謙

富田健一

袋一平

吉澤一郎

名須川渡

小池文雄

武田久吉

吉澤生

吉田竹志

寺田彦次

文理大山岳部

東京商大山岳部

織内信彦

茨木猪之吉

塚本繁松

表面の四

昭和五年十月、嗚々の聲を上げた本會報が遂に爰に第百號を發行することとなつた。

その間九十年、編輯にたゞさはつた人々は勿論のこと、多少とも會報に關心を寄せてゐた會員諸氏は幾何かの感慨なきを得ないであらう。現在編輯に當つてゐる我々としても、この際百號記念に適當した文字を以て巻頭を飾ることが、先づ以て必要のこのやうに思ふが、しかしこうした感情はおいそれと筆に表すことが難しいし、又えて月並な言葉に陥ち入り易いものである。むしろこの際第一號から取り出して、各人各様な思ひに耽りつつ、その時代々の會報の有りの儘な姿を見て戴くことこそ、會報

百號の辭

百號を記念する最も深い意味にもなることであらう。本會報が何う云ふ理由で發刊せられるやうになつたかと云ふ事情については、簡單ではあるが第一號の編輯後記に次のやうに述べられてある。

「今後毎月此の會報を發行することになりました。之を發行する第一の主旨は、毎月の會務並に會の情勢を會員に報告することにあります。年に三回の山岳では兎角疎遠になり勝ちな會と會員との連絡を、此の毎月の會報で結んでゆく事が出来れば大成功でせう。

其他に此の會報に果させ度い大事な役目は其折々の山の知らせや登山界の情勢であります。會員諸兄の殊に地方在住の方々の

御助力を仰げば大變幸です。……」

このやうな主旨のもとに本會報は初代編輯者浦松佐美太郎氏によつて作られたのであつた。この十年間、會報はまづ右の使命を完全とは云へない迄もほゞ盡してきたのではあるまいか。勿論改善さるべき點や新らしく附け加へらるべき點は多々あつたであらう。然しそれ等の大部分が編輯者の努力はもとよりの事であるが、會員諸氏の會に對する、又會報に對する積極的な営みによつて成る可きことであつたとも云へないことはない。これが爲めにはもつと根本に溯つて日本山岳會そのものの意義が鮮明である必要があつた。若し本會報に對して本質的に何等か不満なるもの、不足なるものがあつたとするならば、それは過去約十年間に於ける日本山岳會の旗印が奈邊に在つたか、會員諸氏からすればその見極めの甚だ困難な點に歸す可きであらうと思ふ。

今年には皇紀二千六百年として我が祖國にとつても忘る可からざる年であつたやうに我々の日本山岳會にとつても亦種々記憶さるべきことがある。第一には、永いこと懸案であつた社團法人の認可が近々下りると云ふことである。この事は特に最近の社會情勢を考へ併す時、今後の會の發展の爲必要であるかに思ふ。次に「山岳」も三十五年を數へ、會報が百號に達した事である。そして最後には、近時益々大衆の間に大きく廣く根を張つた日本登山界の健全な發展の爲に、我が日本山岳會が中心となつてこれが全體的統合機關設立に乗り出した事で

ある。

今から九年前、即ち昭和六年の會報第四號には、當時の編輯者浦松氏が「二十六年を迎へて」と云ふ文の中で、次のやうに山岳會の進む可き道を示してゐる。

「日本山岳會は二十六年を迎へて今後如何にゆくべきか。今日の登山界の隆盛を作り上げた以上、その目的既に終れりとして、退くとするならば、それは最早此處に問題とすべきではあるまい。若し日本山岳會存在の意義を將來に見出さうとするならば、我々は一步を進めて、此の年々盛ならんとする日本の登山界をして、更に深く根を張らせる事に努力すべきではあるまいか。漸く社會一般の流行と、その歩調を一にせんとしつつある登山界を強く引き締める役を買つて出るものこそ、日本山岳會ではあるまいか。

……この年一年と増大してゆく、登山界の力強い支持を得る事こそ、今後の日本山岳會の生くべき道であらう。

手を引かずとも日本の登山界は、ぐんぐんと伸びてゆく力を既にその内に、貯へてゐる。伸びる力を持つものは、出来るだけあらゆる方面に廣く強く伸びさせてゆく程美しい實を結ぶ事にならう。此の力の貯蓄を涸渇せしむる事なく、然し常にその正しき發展の爲に使用し得る様に、その内包する力を擴大してゆく所に、今後の日本山岳會の使命があるものと私は思つてゐる。

此の目的を達成するには、各自が惜しむ事なく、共同の目的の爲めに、力を借し合

はなければならぬと思ふ。各自が進んで知識を集めてこそ、初めて明日の日本山岳會の進歩が期待し得られるのであらう。お山の大将は潔く捨てるべきだと思ふ。今後なされるべきあらゆる事業が此の意味に於て具體化される事を望んで止まない。」

續つて考へてみるにそれから約十年間の日本山岳會の歩みが、右の言の如くなつてゐたとは必ずしも思はれない。勿論それには諸々の已むを得ざる理由が在つたことも見逃すことは出来ない。然し一方登山界の情勢は、當時よりも遙かに大衆にその根を下ろして、今日では全くその頃と異つた時代の現出を呈し、加ふるに最近の目まぐるしい迄の變化に従つて、今や日本山岳會としてはどうしても傍觀を許さない所まで立ち到つたやうに思はれる。

今我々は浦松氏の右の言葉をそのまま受け入れるとしても當時の時勢と今日のそれとの甚だしい相違の爲、その現れ方は必ずしも同じではないが、根本方針に關しては大した違ひを見出し得まいと思ふ。かく日本山岳會の旗印が鮮明せられ、その存在の意義が大きく深く會員の前に浮び上つてきてこそ、會報發行の意義も亦前にも益して深められることと思ふ。我々は日本山岳會を愛する限り、會報を愛し、育て、守つてゆきたい。そして日本山岳會の長く大きい歩みを延し、如何なる時代に逢著しても變ることない正しい登山精神を擁護しつつ、その基礎の上に立つて會報の使命を生かしてゆきたいと思ふ。

日本山岳聯盟の結成を前にして

冠 松 次 郎

登山が年を逐うて盛んになり、往年早期登山者の層から學生層に移つて、その登山界の傾向が今日では更に擴大して一般登山者層の隆昌期となつた。

その間に於て私等日本山岳會の者は何をし得たか、たとへば筆や講演等を以てこの大衆の登山層に接した者があつたとは云へ、私は自から考へて一片荒意の責を感じない譯には行かない。

私は自分一己の問題として、山が好きで山に登り、自然の大風景に憧れて未踏の山地に足を踏み入れた。その間何の目的もない。山へ登るそのことが目的でもあり報酬でもあつた。併しそれは自分丈の問題であつて、世相と共に移り變り行く登山界の現状に思ひを及ぼす時、自から別個の問題に逢着する。

考へて見ると眞に自然を好み山へ登る人達（近頃は山を遊び場として男女でふざけ廻る所謂山のヤジ馬を多く見受けるが）それは宗教的に云へば御同行、御同朋であつて、共に手を携へて自然の神祕を探り、その雄峻を尋ね、莊嚴を仰ぎ、そこから限りなき生命の泉を酌む。かう云ふ幸福の人達の間には自づから脈絡貫通したある條理が成立ち、秩序が構成されてゐるのではないか、眞に山を好む人

達の間に関する限り既に大規模の團結の基礎

的條件を具備してゐると云ふのも決して過言ではないと思ふ。然るに一般山岳會の内には、ともすれば小さな會を擁し、相互に排斥し反撃し合ひ、徒に自會の優越を誇るものがあるやうである。これ等はずと大局に着眼して貰ひたいと思ふ。一體そんなことで、これから盛んに行はれんとする組織の大きなエキスベディションが出来るのかと私は云ひたい。

量が多くなれば質に於て劣つて来る。これは今の登山界で云ひ得ることだと思ふ。それが廣らす種々の混亂、喧噪さう云ふことを少し遲延であるが、この際何とか肅正しなければならぬ。それは少しく登山界に興味を持つ者の等しく認める處である。而してこの肅正の効果と云ふこと、必要と云ふことが如何に大いなるかを思ふと、私等は一日も早く登山界を統一し、これを指導し或る意味で教育する事に向つて邁進しなければならぬ。これは實に山岳の尊嚴、その原始的風景を保護する上に至大の關係があると共に、登山精神の振興及び體力向上の礎となるべき、山岳團體存在の大いなる意義を有するものであると思ふ。

山を相手とし、自然を相手とする登山者と

雖も、今日澎湃として動きつゝある世界の風潮に超然たることは出来ない。まして今や我等の皇國は有史この方未曾有の危局に立つてゐる。その時に當つて登山する行爲が、その精神が、實際上少なからず御國の役に立つてゐる現状を見て私等は聊か光榮を感じる。興亜の事業の進展と共に登山界の視野も愈擴大され、私等の前途には世界的の光明が漲つてゐるのを感じる。私等は現状を顧み百尺竿頭更に歩を進めて、日本全登山人の結成を促進し以て大いに國家の動向に適應して奮闘努力すべきであると思ふ。

書齋に籠りて街頭の聲に耳を掩ひ、而して曰く山岳會は文化團體にして體育團體に非ずと、彼等は山岳會は文化團體にして同時に體育團體であり、山の研究機關であると共に、その實行機關でもあり指導機關であると云ふことに強いて疊になつてゐる。

さて當面の問題として日本山岳聯盟（假稱）の結成が要求され、その氣運が急速に動きつゝある。日本山岳會でも既に委員會を設け、その機構、聯絡機關等に就て講究中で、最も着實に最も迅速な方法を以てこれが運動を起さんとしてゐる。恐らくこの會報が會員諸氏の手許に送られる頃には、その輪廓が略ぼ窺知出来ることと思ふ。たゞ現在では未だそれを具體的に發表する機會に達してゐないのを甚だ遺憾とするものである。

（昭和一五・一〇・二九日稿）

時勢と山岳會

額 田 敏

昭和五年十月から發刊された日本山岳會の會報が百號になつた。滿十年と云へば相當の長い年月である。その間、編輯を命ぜられて色々の失敗をした事もあつた。そんな過去の思ひ出をこゝに舊惡露顯をしても仕方がない。

何しろ今日の御時勢となつては、今迄の様に萬事行かない事だけは何と云つても確かだ。この時に吾々はこの山岳會を如何にして行かねばならぬか、この新體制に即應して萬事處理しなければならぬ筈だ。

我國の山岳界は澎湃として、今一つの大きな結成への氣運に向つて居ると云はれてゐる。眞に確然とした、深き土臺の上から湧き上つて居るものならば、我が日本山岳會もそれに無關心であるべき筈ではないが、輿論であるからしてそれが必ずしも眞に正しいものとするとは出来ない。所謂新體制の波に乗つた上つ調子の事でも、大きな力となつて流行することもある。例へば以前一時間とか思想の華やかなりし頃、山岳聯盟が結成せられて堂々と乗り出した事もあつたが、今日その行く末は如何。徒らな群集心理や、アヤフヤなイデオロギーの波に乗つた輿論には餘程眉唾物で冷靜に向はなければならぬ。

登山大衆と其の指導

中 村 謙

山の友人筋が眼をつぶつてヒマラヤの夢を食つてゐる間に、これまで山には少しも關心をもつてゐなかつた人々が、恰も潮の如く我も〜と登山するやうになつて、ホンの僅かの間に我が登山界は全くその面目を一變するに至つたことは、正に驚嘆に値するほどである。

世人の多くはリュクサックを背負ふた登山姿のものを見さへすれば、その凡てが一人前の登山家のやうに考へ勝ちである。従つて今日世間で見える登山家の大部分は、山に年期を入れて確りと山の心を把握してゐる人々ではなく、時代の脚光を浴びて雨後の筍の如く現はれた所謂「登山大衆」なのである。彼等は云はゞ未教育補充兵みたいなもので、何等正式の教育や訓練をうけてゐないが故に、山のいかなるものなるかも知らなければ、山のエチケットも知らないものである。

學生登山群にはそれ自身の訓練機關があり、都下の實業山岳團體にはそれ自身の傳統と統制があつて、いつの間にか登山の心構えが出来るのであるが、この登山大衆に限つては、その行狀を批判し非難するものこそあれ親心をもつて親切に之れを指導陶治する機關としては皆目ないのである。

鐵道省あたりでは事變直前まで盛んにハイキングの宣傳獎勵に大當であつたが、乗客の増加を計るのみが主なる目的で、眞に國民の體位向上を計るとか、自然を通して立派な日本人を作ると云つた指導的方面は全然顧慮してゐなかつたやうである。論より證據、日支

事變が始まつて交通量が增加し、資材の供給が不足を告げるやうになると、恰も手の掌を返すが如くその態度を一變して、寧ろ外出する事を阻止するやうにさへなつてしまつた。

第一次歐洲大戰直後獨逸に行つて居つた人の話をきくと、その頃の獨逸は全く今日の日本同様で「自然に還れ」といふ民族的スローガンの下に、猫も杓子もわんざ〜と戸外に押し出しては、新鮮な空氣を吸ひ、燦々たる日光に浴して體位の向上を計るかはたら、民族精神の涵養に勉めて居つたが、交通機關を利用する場合に先を競ふとか、山野の樹木を荒すとか、山頂を不潔にするとか、そう云つた心配は更に見られなかつたといふことである。

然るに我が國の現状はどうであらうか。それはたとへ國民的習慣の違ひであり、社會的訓練の差異によるとは云ふものの、その懸隔はあまりに甚し過ぎはせぬだらうか。さりとて私は世人の一部が口を極めて罵詈謗を浴せかけるやうに、その責を遽にハイカーにのみ轉嫁するわけにはゆかないと思ふのである。寧ろ日本人全體の公衆道徳に對する水準の低さが、偶々その突角を現はすものと見て我々はお互に反省し、お互に相戒めて、その水準を幾分づつでも高めることに努むべきが至當ではあるまいか。とまれ、このなきけな状態をまともに見せつけられ乍ら、これを如何とも爲し得ないのが、今日我が山岳界に於ける現状なのである。

今日日本に於ける山岳界に最もさし迫つた、最も重要な問題があるとすれば、それは所謂新體制の問題でもなければ、遭難對策の問題でもなく、實にこの登山大衆を如何に指導し、如何に陶治するかの問題であつて、こ

れは一刻も忽にすることが出来ないのである。あんな低調な連中は相手にせぬと、雲上人をきめ込んで對岸の火災視することは、國家の現状から見て洵に相濟まぬことであると同時に、この現状をこの儘放任して置けば、早晚我々自身もヒマラヤは愚か、内地の土手にさへ登れないやうになることは、あまりにも明瞭ではないか。

然らば一體誰れが、その指導統制に乗り出すべきか。厚生省可なり、鐵道省又可なりではあるが、實は事登山に關する限りは、最もその内部的事情に通曉し最も其道の權威者を網羅してゐる筈の日本山岳會が母體となつて、全國の山岳團體に呼びかけ、厚生省、鐵道省等關係當局と緊密なる連絡を計つて、馬を陳頭にすゝめるべきではあるまいか。

從來の日本山岳會はあまりにも雲上人でありあまりにも高踏的であり過ぎた。平時に於いてはそれも結構である。然し乍ら今日この非常時に、自分自身の趣味や趣向にのみ立てこもつて山岳界全體の將來を顧みないと云ふ事は許されない罪惡でなくてはならないであらう。

夙聞するところ最近の理事會に於いて、日本山岳會は從來の消極的態度を一擲し、退嬰的方針を一變して、大いに本邦山岳界の爲めに積極的活動を始めることに一決したとか。甚だ遅時き乍ら洵に結構なこと、同慶に堪えない次第である。そうすることこそ、今日この非常時に於いて日本山岳會の生くべき道であり、存在價值を高める所以でもあらう。

私は日本山岳會の會報が第百號に達したことをお祝ひすると共に、前途いよ〜多事多難ならんとする本邦山岳界の爲め雄々しくも再出發した日本山岳會の活躍振りを大いに刮目して期待してゐる次第である。

この實行に際しては（若し大いに價值あるものと假定して）濟を固めて懸らねばならぬ。利害得失の一つ一つ異つた群象山岳會の、而も夫れ夫れにお山の大将があるに於てをやである。又よし幸にも圓滿な結成が出来たとし、ても、色々な問題が、二重乃至三重的會員に對して起り得る事も考へると、聯盟下の會員を如何に處理しなければならぬかと云ふ事も先づ考へなければならぬ。矢張り當初の主旨とか目的が極めてはつきりと定められて居なければ、近き將來又解消と云ふ様な事にもなり得る。

つまり、日本山岳會はこの輿論に對して洞察の見地で以つて機を觀てその行動を起すべきであらう。

又夫々の山岳會に於ても此際は、舊來の宿命的な主張や關係をサラリと打捨て、全日本の山岳界の爲めに一丸となり、大きな一つの整つた歩調で進むだけの雅量と覺悟と決心がなければならぬ。

一大聯盟は結成されたが、依然として聯盟の山岳人の公徳を無視した行爲が少しも衰へず、遭難事件は頻發すると云つたのでは何にもならない。只一時の功利的な目的での聯盟はやめた方が宜しい。眞に山岳を透して我々が人をつくることの出来る様な、而も聯盟の皆が所謂總親和で進み得る組織が結成せられる事を希望する。斯かる大結成は速に具體化されん事を望む。



ペンケパンケ

小池 文雄

始めて天鹽の沿岸に着いた時は只
すさまじき國哉と思つた。見渡すか
ぎり笹藪の山が海に迫つて、地貌は
古いのか新しいのか見當も付かぬが
信州邊の彫削のきはだつた山々とは
全然異つてゐた。

家の恰好まで黒ずんだ木片の塊と
云ふ氣がして、成程地面の底は海を
潜つて西伯利亞に續いてゐるなど云
ふ感じを受けた。

町の人達は防空演習には殊の外熱
心だ。

内地の山の千八百米位より上を切
り取つて、ぢかに海面に置いたと云
ふのが、北海道でも北の方の天鹽や
北見の沿岸の氣候や風土の大略であ
らう。

留萌の町の南にある暑寒別岳は五

月下旬までベツトリ
眞白で、大體二七〇

〇米級の山から受け
る感じだ。北海道の

山は何處でもさうで
あるが、蛇が恐ろし

く多く、これの對抗
策にはつくづく弱つ

た。仕方なしに笹の
手箒を造つて絶えず

拂ひ除け乍ら歩いた
が、後で聞いた事で

あるがフマキユラー
等の驅蟲劑が特殊の

香料を噴霧器で身體に吹き付けて歩
けば、大分有效であると聞いて笑つ

た事だつた。

「ダニ」の多いにも驚く。少し腰を
下ろして休んでゐると裾の靴下や、

ズボンと上衣の間隙とか少しでも皮
膚の現はれてゐる所から、すかさず

匂ひ込んで肉の中に頭を突込んで喰
込み、引張つてもからだは半分ちぎ

れて皮膚の中に残る。

富士に登つても別に駿河灣や相模
灣等の太平洋の海は視界こそ廣がれ

高くなつた感じは無かつたが、暑寒
別岳に登つた時は自分の立脚點が高

まるにつれ、海が恐ろしく盛り上つ
て高くなつて見えた。月の澄んだ夏

た中學生が、お月様が近くなつたな
つたと喜んでゐた。

ヌタツクカムウシユベから十勝へ
の山波、石狩平野の燈、マツカリヌ

アリ。

宗谷海峡までは見えぬだらうに天
鹽の沿岸が北に延びて見えざる處

に、ピカピカ光るものが見えた。海
の様でもあり、陸地の間に挟まつて

ゐる様や色合から湖水の様でもあつ
た。天鹽川が蛇行して海に注ぐ一帯

は沼澤の荒蕪地で、幾里四方でも出
願によつて無償交付すると云ふ。但

し必ず一定期限内に造林又は開拓の
義務を條件とする。

利尻島へ旅行し様と思つて沿岸一
帯の地圖を買つた。天鹽町から稚吹

内までは實に單調にして雄大な砂
丘の連亘した海岸らしい。

こんな所を一ツツの驛邊に泊り
ながら、自轉車旅行でもして見たら

ばと思つて見たりもする。こんな所
を貫つたら先づ何を目るんだらよか

らう、牧場か農場か。峻烈な自然の
暴威は其の何れをも駄目にしてしま

うだらう。此處のサロベツ川の流域
に「ペンケ沼」「バンケ沼」と云ふ二

つの姉妹湖がある。何れも周圍二里
位の沼だが、バンケの方が少し大き

い。「バンケ」は「上」で「バンケ」
は「下」らしい。幌延から兜沼へ行

日本山岳會の行方

富田 健一

かねてより感じてゐた事であり、
關西理事の方々に傳へて頂く事を考
へたのであるが、言葉や感情の行き
違ひなどで迷惑をかけないとも限ら
ないので、會報上で述べさせて頂く
事にした。

日本山岳會と云へば呼稱上日本の
最高登山團體であるかのやうに見ら
れ易い。之は種々な點で在來の本會
とマツチしない考へ方、見方であり
(と私は考へる)、そうした誤認によ
る的外れな非難なども生じてゐたや
うであるが、勿論山岳團體代表を以
て任じてゐた譯でないから、そうし
た誤解にはこだはる必要はなかつた
のである。が世上の噂はとも角とし
て、會員間に於ても今迄の日本山岳
會の活動振りについては疑問とされ
る節々があり、又不満の聲を聞かさ
れたりしてゐたのである。しかし會
には會としての規約があり且又永い
傳統もあつて、それらの希望の一つ
一つに對し直ちに副ひ難い點があつ
たものとみえ、何れも黙殺されるの
止むなき始末であつたやうである。
にも拘らず私が敢て會報を通じて會
員の意見をたゞき、理事者の方針を

何はんとするのは、重大な
轉換期を迎へた我が國の體
育運動の一環として、古い
歴史を持つ本會が如何なる
方策を以て處せられやうと

するのか、會員として明瞭に知つて
をきたいと思つたからである。

過去に於て日本山岳會が主體とな
つて各種の講習會、講演會、映畫會
等によつて大衆教育をやつてもらひ
たいとか、或ひは日本の山岳界をリ
ードする性質の仕事を発表されたい
などとの聲は相當高かつたにも拘ら
ず、謙虛といふのかそれらに一向手
を染められなかつたのは(明確な反
對理由を聞いてゐないので斷定を下
す譯にはゆかないが)、日本山岳會に
漲つてゐた消極方針の傳統を守られ
た爲であつたからだと思ふ。だが茲
數年來の登山界の動きを眺め、又國
を擧げての新體制に移行しつゝある
姿をみつむる時、獨り登山團體のみ
が又敢ていふ日本山岳會のみが、超
然として非活動的な舊殼に燻ぶつて
ゐてよいものだらうか。遅時きでは
あるが、昨今こそ會則第三條第二項
の具體的運動に進む餘りにも當然の
機會であらうかと思ふ。日本山岳會
として今更らそうしたブライマリー
な仕事をしてはじまらないとか、
そんな仕事をしてとや角の批評を受
けたくないなどとの、消極的な態勢

丈けだつたが、利尻岳の頂上からは海を越してよく見えた。

暑寒別岳の頂上から見た幾つものピカピカ光るものは、此の「ペンケ」「バンケ」と兜沼及び稚内の南の「シュブン沼」の四つの湖だつたのだとわかつた。

僅かに窓ガラスを打つ雨を透して見た兜沼は、折からの風にざわめき立つた湖面の波と岸邊の樹木と共に巧みなる美を擡げてゐた。

勇知、抜海と来ると共に全く北邊の感じだ。

鐵道線路の直ぐ傍でさへも開墾されずに熊笹や葎の繁るに任せ、抜海驛の近くには無線電信局があり、所員の官舎が荒れ果てた自然の中に高い塔と共に不似合にそれだけは別の世界をなしてゐた。

八月と云ふに稚内の本通りを歩いても鶯が聞かれ夕暮の散歩は單衣では廣寒い。

此處から利尻、禮文兩島へ通ふ船は東洋丸と云ふ二百噸ばかりの小さい船。でも客船だけあつて救命ボートの用意から無線のアンテナまである。

こんなお門違ひの旅行者は自分を交へて極く少数と思つてゐたのに反して、朝棧橋に集つた乗客の多いのは驚いた。百名も遙かに突破してゐた。稚内の少年が利尻山へ登るん

だと云つて乗り込んでゐた。

久しく山らしい山を見なかつた眼には、利尻島のぐんぐんせり上つて人に迫る高度は何とも云へず頼もしかつた。地圖で見ては極く小さい「ボン山」さへも、海岸から見上げた姿は僅か四百米の山とは見えぬ麗澤の棧敷山か湯ノ丸でも見る感じだつた。

利尻には蛇と熊が居らぬと云ふ。新しい火山島の故爲か。

併し凡ては景色は纏つて居て小さく、内地の景情を思はしむるに充分であつた。

此處に姫沼と云ふ小さい沼がある。松原湖と云つた感じで湖畔の森林の様等、上高地の明神池のほとりにでも居るんぢやないかと思はしめる程だ。此の水を落して電氣を起して、島の四ヶ村に配給してゐる等、何處までも小さく纏つてゐる。

海流の關係か稚内より暖く、物資も汽船で、小樽より直接に來る爲か割に豊富である。其他、家造り、道路のうねり等、相當さびが出てゐて本島（北海道）の様に何處に行つても眞直ぐな道路、半洋風な家屋等とは一種又別な感じだ。

金物屋の店頭にあつた津輕鎌だつたか秋田鎌だつたか一寸恰好が面白かつたので土産にした。

て、三日許りと云ふものは一日に數十回、通勤を餘儀なくせられてゐたために朝起きた時は、非常に嫌だつたが何だか登らねばすまぬ氣がしたので、殆んど食はず飲まずで登つた。

どうせ飯は食へないのだからと思つて前夜カルピスだと思つて買ひ込んだのが、山の中腹の各川まで背負ひ上げて封を切つて始めて「……ピス」とか云ふ驅蝇劑だつたりして、怒つて岩にぶつつけて割つて見たけれど、石油の様な五色の薄膜のキラギラが水に散つただけだつた。

そんなこんなで、水一滴も携行せずの山行は利尻の一五〇〇から残りの二〇〇米許りは割に苦しかつたがお花畑、残雪、ガレを見るに及んでやつぱり来てよかつたと思つた。

天鹽の沿岸には焼尻、天賣と云ふ姉妹島があつて、利尻の頂上からは兩の眉毛を刷いた様に見えるし、留萌の海岸からも天氣のよい日には海上から望まれる。此の粟粒の様な島の事も色々聞いてゐるので行つて見度いと思つてゐるが未だに果たさない。

★カット……前頁の新しいカットは會員川喜田壯太郎氏作。題「志賀高原」。

で納つてゐてもよいのであるかどうか。急激な轉換期にある我が國であるだけに疑問だと思ふ。從來も時々の問題や行動について、しばしば他の山岳團體にイニシアチブをとられ、個人は別として會としての非活動性を秘かに歎じてゐた會員も案外に多いのである。高くともつて何にも手を出さないでゐては、他の山岳團體からさへも仲間外れにされるに至らう。女性的な毀譽褒貶を氣にしてゐては何事もやれない。本會單獨でやり難ければ他の山岳團體と協同の上で實踐してもかまはないではないか。黒田孝雄氏も會報八十六號に於て『各團體の共同作業計畫は大いに獎勵するべき事である』といはれ『よそ行きの態度をすてて』動く事を期待されてゐるにも拘らず、會としては一向に能動的機運を生ずるに至らなかつたものらしい。立派な會員（先輩岳人）を有し乍ら實の出し惜しみといった感じを興へるのは當然であつたらう。

遠征登山の研究も進められるべき貴重な一項目であると同時に、又一般大衆を目的としての『健全なる登山氣風の振興を期す』事も本會の目的（會則第二條）通りである。殊に最近の如き浮薄なる登山者の輩出する時には重要な課題であると思はれるし、その方法として採らるべき諸種の催し或ひは官公署との交渉聯絡なども（會則第三條第二項にあたる）當然早くより行はれてゐるべきものであつたと思ふ。十月號會報によれば本會が全國の登山團體の統制機關となる事や、登山用具資材配給の件といふのが理事會に上提されてゐたが、どうか着實にしかも最下部の仕事をも避けずにとし／＼手をつけて行つて貰ひたいと思ふ。いきなり高踏的な問題を採り上げ、誰もついてこないやうでは何にもならない。統制とか配給とかの問題をとりあげるからには、改めて日本の登山團體の中心としての誇りを持し責任を感じ、且つその上に立つて實力ある運動に敢然と入つて行つて貰はない限り、今度は自ら論議の渦中に入る事になるのではないかと思ふ。一人でも多くの眞實なる登山者を得、避難防止の一助となり、國民體位向上運動、職能報國精神の片翼となる事については些かも躊躇さるべき問題でなく、從來の傳統（不文律といふか）はこの際最近流行の發展的解消をなさしめ、新日本登山道樹立に突進すべきであらうと思ふ。

私の如き者が申す迄もなく理事會等に於て論議されてゐるかと思ふが、會報上の會務報告は簡略にすぎ各理事の意見等は一寸も知らされてゐない。私は先輩岳人理事諸氏に對

し深い尊敬と信頼を抱いてゐる。であればこそ尙更この際諸氏の尊い意見を静かに承らして頂きたく、又指導を受けたいと念願するのである。

次に之は支部規則に明記され乍ら末だ一度も正式に行はれてゐない關西會員大會を開催して頂くやう、先日關西理事に御依頼してゐたので近く實現する事と思ふが、その席上に本部理事を二名以上毎年迎へて關東の状況を關西會員に傳へて頂き、同時にそうした知名の先輩と關西會員との接觸を圖つて頂ければ甚だ結構な事と思ふ。

紀元二千六百年、會報第百號を一つの轉機として、我が日本山岳會の活潑な動きを期待することや切である。(十月五日記)

追記 その後關西に於ては登山團體の聯盟結成運動が活潑に進捗し、十月二十二日には西日本山岳聯盟の設立準備委員による講演會が催され十一月から十二月にかけて各府縣別の聯合が結成される様であり(關東も同様過程にある事と推察されるが)それらの組織及事業を眺み合せて日本山岳會がとるべき今後の動向に就いては殊の外注意が拂はるべきであらう。從來の個人的な趣味上の集りだからといった新國家觀にそぐはない觀念の停滯は許されず、之等新情勢を検討明察し誤りなく日本山岳會

をリトドし聯盟と協力するの責任と誇りが今の理事者に與へられてゐる



忠別岳の

雪穴生活

寺田彦次

關西の會員富田健一氏が本年三月大雪山方面へ赴かれた折、偶々大雪山より十勝岳への縦走を試みんとして、不幸にも猛吹雪の爲忠別岳の雪穴に九日間も滞在を餘儀なくされた一登山者(寺田彦次氏)に邂逅し(會報九十三號十三頁参照)、其後富田氏の御骨折によつて寺田氏から得られたのが、茲に發表した貴重な體驗記である。

雪洞生活の研究は未だ雪中幕營の域に達してをらず、豫め意圖せられた雪洞生活でも九日間の長きに亘るものは稀れであつて、茲に述べられてゐるやうに只一人で九日間も雪穴に頑張られた經驗は洵にその類を見ないものである。積雪期の登山をされる方々に參考となる點が少くなくあらう。(編者記)

× × ×

皇紀二千六百年の三月を迎へ、豫てから胸裡にゑがいてゐた大雪山—十勝岳の縦走を企て、不運にも猛吹雪に遭ひ忠別岳に雪穴生活を餘儀なくされた顛末を、依頼さるゝまゝ

ものと思考せられるのである。(十月廿四日補記す)

に綴つてみる。

私が愛山溪温泉から忠別岳に登頂したのは昭和十五年三月十一日、その日は朝から山も晴れて終日上天氣であつた。温泉宿で餘り天氣が良いので氣味が悪いと云つて出掛けたが、旭岳の斜面にかゝる頃燦々と輝く太陽に、かすか乍らも輪がかゝつてゐたので幾分氣にならないではなかつた。併しあまりの晴天に露營の用意までしてきたので、目的の山忠別岳を目指して進んだのである。過去に於て冬期の忠別岳が全くの未登峰であるを聞き、自分でも一日では到達すまいと思つてゐたのに、上乘のコンディションとは云ひ乍ら、早くも三時十分その頂上を究め得たので、豫ての宿望であつた十勝岳側へ降りて積雪の多い斜面へ、二時間近く費して雪穴を堀つた。

此の様なアラインゲーションは、或いは無鐵砲、盲目蛇と思はれる人もあるかも知れない。成程私は山に對する知識も少く、經驗も淺く、學問も力量もなければ金もなし、従つて登山に必要な用具も充分持たない私である。スキーに乗れるやうになつたのも、山へ行けるやうになつたのも、最近と云つて良い。以前にはスキーに乗つて見たくもスキーなし山へ行き度くも暇なし、費用なしで行つたと云ふのは近くの山へ野菜か山葡萄取り位のものであつた。其後どうにか人並に親兄弟にも多少の支援が出来るやうになり、スキーにも乗れる様になり、冬山へも行くやうになつた。次いでシュタイグ・アイゼンを求め、次にはビッケルと云ふ具合にして現在に至つたが、今とて完全なシュラフザツクは持つてゐない。今年使用したものは、自製で鳥の羽根は入れたが、方々からはみ出し甚だ不完全なものであつた。

話は少々横道へ入るが、私がどうか一人で山に行けるやうになつた始めの體驗は、昭和十二年三月末旭川山岳會で十勝岳から大雪山へ縦走計畫を行ひ、それに参加させて貰つたことである。此の時も吹雪の爲只一夜雪中に過したのみで、壯途挫折の已むなきに至つた。私を加へ一行七名、三月二十二日午前二時半に起床、四時二十分出發、美瑛富士中腹を捲き、オプタテシケへの鞍部へ達したのは十二時頃であつたが、重いリュツクサツクに、風が強くなつて來たので其處で幕營した。が夕方から降雪烈しく、吹雪となり多量の積雪を起した程である。

此の時の經驗で、多量の降雪が豫想される場合に天幕は不向きと思ひ、今回は雪穴で過す事にしたが、これとても満足は出来なかつた。次に當時の日記を記してみる。

三月九日 午前九時二十分安足間驛を出發、五里餘の愛山溪温泉へ向つたが、リュツク重く五時半漸く温泉へ着く。

三月十日 曇後晴 前からの風邪氣味で體の具合も悪く、山も曇つてゐる上それとなく時間も過したので、一日休養することにした。

午後から快晴になつたので、體ならしの意味でリュツクも持たず、一時に出發沼の平に出、當座乗越一廻りして歸る。

三月十一日 晴 昨日の休養で元氣恢復、宿の心盡しか朝食も早く済ましたので、豫定より早く六時に出發した。

陽光輝く太陽を仰ぎつゝ、九時過ぎ旭岳の斜面にかゝつた。その時かすか乍ら太陽に笠が掛つたのはつと胸を打つものがあつたが、露營の用意もあるし、この晴天に引返されやうかと思ひ、十時半旭岳と熊ヶ岳の鞍部を越へて晝食にした。雪が締つてラッセルに

苦しむこともなく、十二時半には白雲岳の下を通り過ぎ、目指す忠別岳の麓に辿り着いたのは二時過ぎであった。ふと見ると百米許り前方に狐一匹しばらく此方を凝視してゐたが、やがて身を隠して山影にと姿をかくした。

吹飛ばされてガラ／＼の岩肌にスキーを脱ぎ、一路頂上を目指して登り、遂に絶頂に達し得たのは三

時二十分であった。今迄冬の忠別岳に達した人がないと聞かされ一日では到底達せられないと思つてゐたのに、上乗のコンディションとは云ひながら、三時二十分に到達し得たので大いに意を強くし、此の分ならあと一二泊で十勝岳まで縦走出来るかも知れないと、約十分休憩の後十勝岳方面へ降り、五色ヶ原との境の澤の斜面

に横穴を掘つて小屋とし過す事にした。穴を掘るに二時間近く費したが、六時近く中に入り、入り口を持参の天幕でふさぎ、雪を融かして食事の仕度にかゝつたが、慣れの爲九時頃やうやく食事を済ました。

先程忠別岳頂上に立つた時、再び太陽に輪が掛つたのを思ひ出し、明日の天候悪化は免れまいと思ひ

つゝ寝に就いたが、下が冷々として熟睡は出来なかつた。

穴の中の温度はアルコールで煮炊のせいもあるが、プラス二度位であつた。

三月十二日 雪 昨日から豫想して居た通り雪降りであつた。朝の中は風が無かつたので出掛けられぬ事も無かつたが、明日の晴天を楽しみに今日一日此の雪穴で暮すこ

今年の二月中旬頃であつたかと思ふが、故岡田三郎助畫伯の遺作展覽會が、上野の府美術館で開かれると聞いたので、旅行前の忙しい半日を割いて、上野まで出かけて見た。出不精な私だとして、年に二三度は繪畫の展覽會に行つて見るが、大抵の場合数の多いのと、作者が代る毎に繪の特徴がまるで違ふ場合が多い爲め、疲勞を覚える事甚しいのでいつも閉口するが、個人

展である御蔭で、點数は相當に多かつたが、眩暈を感じるやうな目には遠はらずに済んだのは有難かつた。

岡田畫伯とは、三十幾年來近づきであつたにも関わらず、何故か作品に接する機會の甚だ少なかつたのは、今考へてもおかしい話である。處で今それが一堂に集られ、初期中期後期の作品がズバリと並んでゐるのを見ると、故人と膝を交へてゆる／＼對談してゐるやうな感じがして、何とも言へず嬉しいことであつた。そしてどの作品を見ても、皆入念に描かれてゐるし、習作でも決して筆をゆるがせにしまなかつた故人の眞剣な性格が、畫面ににじみ出てゐるのを見て、流石は文化勳章を授かつただ

けのことあると、つく／＼感心してしまつた。

人物や花等の靜物を得意とした畫伯であるだけに、山の畫の少なかつたことは止むを得ない。生前足跡は可なり廣かつたやうであるが、山岳畫協會の會員と違つて、困苦を冒して高山に登るやうなことをせられなかつたから、山の畫はといふと概ね旅宿の窓から眺めて描いたらしいもの許りであつたのは、吾々としては一抹の淋しさを感じない譯に行かない。それでも偶には屋外に畫架を据えて、山を睨み乍ら描いたかと思はれるものもないではなかつた。

畫は寫眞に非ることは萬々承知乍ら、花なり山なりの特徴だけは省略しないで欲しいものと、私は常に考へてゐる。富士の東面乃至北面からの畫に、あの御額のない畫を見る毎に、私は非常な落膽を感じずにはゐられない。

然らば「御額」とはどんなものかといふに山頂八峯の一である藥師ヶ岳の外側に出た岩棚であつて、これが吉田口の走りの澤のツメに暗色の明瞭な一線を劃してゐるのである。殊に積雪期には、當然尙更顯著である。東北面の富士を仰ぐ毎に、あの廣闊なそして平和な感じのする走りの澤の頂端に、御額が暗色の一線を形造るのを見ると、優雅な樂曲に適當な休止符のあるのと同じ様に思はれて、若しそれが缺けてゐたとしたならば、何となしに物足りない感じを誰しも持つであらうと、勝手な説かも知れないが、私考を披瀝して置く。

（終）

とにした。無聊の淋しさから昨日の愉快さを想ひ浮べ、一寸と聞いた事のある歌の節を思ひ出しつゝ、自分の愉快なスキー行を歌に作り、無聊を慰め樂しみにした。夕刻飯を炊き、蠟燭をつけやうと思つたら火がつかなくなつたのでこれは大變と手拭を振りまはし、空氣の移動に努めてみたが駄目なので、諦めて電池をつけた。ふさがれた空氣穴を明け直し、一時間餘の後つけたら今度はついたのでやれ／＼と思つた。

三月十三日 吹雪 天氣は良いだらうと思つてゐたのに悪く、吹雪は昨日より尙烈しく、次々と積る雪に空氣穴は明けても／＼忽ち閉され、四尺近くの積雪に心細くなり昨日の愉快さはどこへやら。空氣穴の無い夜を過すと思へば一本のマッチも點けられなくなつた。

三月十四日 吹雪 朝深く閉された雪を、中からストックで突き破りやうやく這ひ出し、入口の雪をすつかり取りのけ、濡れ物を蠟燭の火で氣長に長時間掛つて乾した。この時に到つて始めて山と云ふ事を深く感じさせられ、出發前温泉の田中氏が、忠別岳まで行つて來られたら、大した物ですよと云はれた言葉を思ひ出し、場合によつては松山温泉へ下るかも知れないからとは云つて出たが、出發の日一日だけの晴天であり、定めし温泉の人達も心配してをられるだら

◇ 額 御 の 士 富 ◇

吉 久 田 武

岡田畫伯とは、三十幾年來近づきであつたにも関わらず、何故か作品に接する機會の甚だ少なかつたのは、今考へてもおかしい話である。處で今それが一堂に集られ、初期中期後期の作品がズバリと並んでゐるのを見ると、故人と膝を交へてゆる／＼對談してゐるやうな感じがして、何とも言へず嬉しいことであつた。そしてどの作品を見ても、皆入念に描かれてゐるし、習作でも決して筆をゆるがせにしまなかつた故人の眞剣な性格が、畫面ににじみ出てゐるのを見て、流石は文化勳章を授かつただ

た富士山があつた。遺憾乍らこの作品は、山岳の觀察が未だ一向進まない内のもものと見えて、富士山と題してこそあつても、富士岳を描いてはなくて、唯所謂富士形の山をカンヴァスの上に塗り上げたといふに過ぎなかつた。箱根から見た富士山に、寶永山をも現はしてないことは、千慮の一失といはうか、とに角失敗の作と申すの外ない。

處が後期の作品中に、河口方面から仰いだ富士山が、慥か二面あつたやうに思ふ。これは金時山の畫と同じく、ジャクリ山に見入つて筆を執つたものなることに寸分の間違ひはない。その輪廓といひ、斜面の凹凸といひ、前のものに比すれば實

（終）

う、十勝岳へ縦走などと餘り慾張り過ぎた、温泉へ引返さうかと思つた。

三月十五日 吹雪 依然として天候は恢復しないが、此の上何時迄も此の雪穴に居るのも堪えられず、荷物を纏めて出掛けたが、

此の吹雪に忠別越えの難きを思ひ、約三十分にて元へ引返へし穴を掘り



松山温泉

吹上温泉

間奥になつてしま

心の底から謝らないでは居られなかつた。若し此處で自分が一命を捨てるとしたら、誰が見付けて呉れやう。誰がこんな處まで来てくれやう。せめて旭岳の近くなら兎も角、来てくれる人は恐ろしくな

た事はないし、又五時頃には五寸や一尺位の雪ならかなり明りがさして来るのに、今朝は少しの明りも見えず眞の闇に、まだ宵の七時かな？とも考へてみたが、そんな筈もないので仕度をしてスキーで穴を明けて見たら、四尺に近い雪にすつかり埋められ、最初掘つた所より三四間奥になつてしま

し良いやうにも見えたが、午後から又猛烈な吹雪となり忽ち穴は埋められてしまつた。こゝに到り、何とかして忠別岳を越そう、そして温泉へ一歩でも近づかう、来る時は一日で樂々來たが今は一日で歸れる望みもないので、せめて一日で樂々歸れる處までゝもと思つた。然し此の吹雪の中を如何にして越すべきかと色々考へ苦心した。今日又は充分食事もせず、節食を續けて來たが、體力を作るべく兎に角十時頃飯を炊いて食事を更に三時過又飯を炊いて決行出来るか否か、不安ながらも明日への鋭氣を養ふ事に努めた。

三月十八日 吹雪 昨日から心に決めた乍ら實行出来るかどうか頗る不安であつたが、遂に意を決し、始め自分が入れるだけであつた雪穴の、今では三四間にもなつた假の宿に八日間無事に過し得た感謝の意を表し且再び此處に相見ざるやうにと念じつゝ、吹雪の中に突進した。二時間餘りも費して見覚えある忠別岳頂上に再び立つことを得たので、方角を間違えぬやうにと降りに掛り、吹飛ばされた北面の岩肌をスキーをぬぎ、途中幾度も地圖を見磁石を見て降りて行く。十一時頃忠別岳を越す事が出来たが、見覚えのない所へ出たので、どうしたのかと一時間許り止つて考へた末漸く下り過ぎたと云ふ事に氣が付いたが、猛烈な吹雪にガスが掛つたやうになり、全然見通しがきかず、雪の斜面もわからないので進退窮し、十二時過ぎ幸ひに見付け得た目前の雪壁に雪穴を掘つて入つたが、忽ち埋められてしまつた。吹溜り雪が締つてゐなかつたので不安を感じ、前よりも高く掘つた。何時止むかわからぬ目前の吹雪を、穴の内から震へ乍ら眺め、温泉で樂々と體を休める事を思ふ時、お里懸しきで胸が一杯になつた。然し今日此の吹雪の中に忠別岳を越し得たことを思ふ時、愉快な氣もした。此の夜の温度は見なかつたが、一番寒く感ぜられ睡むれなかつた。

三月十九日 次第に晴れる 今日で温泉を出てから九日にもなるが、昨日の様を思ひ浮べると起きる勇氣もない。が空氣も通はぬ雪穴に何時迄もじつとして居られず、入口の方を見ると吹き寄せられた軟雪であつたので、一尺餘り下つてゐた。せめて空氣穴だけでもと、そつと穴を明けて見ると、ガスで良く見えなかつたが、昨日より良いやうであり、吹雪が止んでゐるので、朝食もそこゝ雪水に乾パンの腹こしらえに元氣を付けて、七時頃昨日から考へてゐた方角へ進んだ。

吹飛ばされた峰に出た時、一瞬旭岳らしい頂が霧の合間から幽かに見えたので元氣づき、霧の瞬間を念じつゝ後方旭間近に迫り着いて

直し入口の上へ近くに在つた俣松を切つて列べ屋根として、穴を大きくすることに努めた。山と云ふ事を深く感ぜられた今は長期に堪へ得べく、食物も多く採らず、出來得る限り節食して堪え忍ぶやうに努めた。今日も入口に躍み、じつと外を見つむる事幾時間。足は冷え痺れ、果てしがないので中に入つて靴を脱ぎ、若しや皆に迷惑をかけ騒がせてゐるのではないだらうかと思ふ時、じつとしてゐるに堪えられない思ひがしたが、此の吹雪には如何にも出來ない。親達の知る所となり、眼に涙を一杯に此の馬鹿者めと叱られさうな顔を想像する時、思はず済みません、どうぞ許して下さいと

らう。若し此の吹雪が何時迄も續き、歸り得るだけの食糧がないとしたら、せめて高根ヶ原の峰までゝも出て斃れねばなるまい。然し温泉の人達にも、今年こそは天候に恵まれ必ず成功されますよと、力強く聲援して貰つた筈だ。斃れることなど絶対に無いと思ふのに、何時迄も續くこの吹雪はどうしたにか。

三月十六日 吹雪 文餘の雪下に、幽ながら聞えて來る風の音に、今日も見込なしと思へば起きる氣にもなれず、いつて何時迄もじつとしてゐる譯にも行かないので、電池を點けて時計を見たら早七時になつてゐたので、びつくりして起きた。何時もこんなに遅く起き

た事はないし、又五時頃には五寸や一尺位の雪ならかなり明りがさして来るのに、今朝は少しの明りも見えず眞の闇に、まだ宵の七時かな？とも考へてみたが、そんな筈もないので仕度をしてスキーで穴を明けて見たら、四尺に近い雪にすつかり埋められ、最初掘つた所より三四間奥になつてしま

し良いやうにも見えたが、午後から又猛烈な吹雪となり忽ち穴は埋められてしまつた。こゝに到り、何とかして忠別岳を越そう、そして温泉へ一歩でも近づかう、来る時は一日で樂々來たが今は一日で歸れる望みもないので、せめて一日で樂々歸れる處までゝもと思つた。然し此の吹雪の中を如何にして越すべきかと色々考へ苦心した。今日又は充分食事もせず、節食を續けて來たが、體力を作るべく兎に角十時頃飯を炊いて食事を更に三時過又飯を炊いて決行出来るか否か、不安ながらも明日への鋭氣を養ふ事に努めた。

三月十八日 吹雪 昨日から心に決めた乍ら實行出来るかどうか頗る不安であつたが、遂に意を決し、始め自分が入れるだけであつた雪穴の、今では三四間にもなつた假の宿に八日間無事に過し得た感謝の意を表し且再び此處に相見ざるやうにと念じつゝ、吹雪の中に突進した。二時間餘りも費して見覚えある忠別岳頂上に再び立つことを得たので、方角を間違えぬやうにと降りに掛り、吹飛ばされた北面の岩肌をスキーをぬぎ、途中幾度も地圖を見磁石を見て降りて行く。十一時頃忠別岳を越す事が出来たが、見覚えのない所へ出たので、どうしたのかと一時間許り止つて考へた末漸く下り過ぎたと云ふ事に氣が付いたが、猛烈な吹雪にガスが掛つたやうになり、全然見通しがきかず、雪の斜面もわからないので進退窮し、十二時過ぎ幸ひに見付け得た目前の雪壁に雪穴を掘つて入つたが、忽ち埋められてしまつた。吹溜り雪が締つてゐなかつたので不安を感じ、前よりも高く掘つた。何時止むかわからぬ目前の吹雪を、穴の内から震へ乍ら眺め、温泉で樂々と體を休める事を思ふ時、お里懸しきで胸が一杯になつた。然し今日此の吹雪の中に忠別岳を越し得たことを思ふ時、愉快な氣もした。此の夜の温度は見なかつたが、一番寒く感ぜられ睡むれなかつた。

三月十九日 次第に晴れる 今日で温泉を出てから九日にもなるが、昨日の様を思ひ浮べると起きる勇氣もない。が空氣も通はぬ雪穴に何時迄もじつとして居られず、入口の方を見ると吹き寄せられた軟雪であつたので、一尺餘り下つてゐた。せめて空氣穴だけでもと、そつと穴を明けて見ると、ガスで良く見えなかつたが、昨日より良いやうであり、吹雪が止んでゐるので、朝食もそこゝ雪水に乾パンの腹こしらえに元氣を付けて、七時頃昨日から考へてゐた方角へ進んだ。

吹飛ばされた峰に出た時、一瞬旭岳らしい頂が霧の合間から幽かに見えたので元氣づき、霧の瞬間を念じつゝ後方旭間近に迫り着いて

谷の越え場を見定めてゐる中、又も霧が薄らぎ難く、後方旭斜面に迫り付き得られ、今日こそ歸れるかと思へばたまらなく嬉しかつた。旭岳に登り始める頃から霧も晴れすつかり晴天になつた。鞍部を越しざ下らうと思つた時、遙か下にスプールを發見、間もなく三人の登行者（後に日本山岳會々員、富田健一氏と温泉の田中氏等と知る）を旭岳の肩近くに仰ぎ見たので、大きい聲で呼びかけてみた。思ふやうに聲も出ず、上でも聞きとれぬらしかつたが、上から下で待つて居れといふ聲だけが聞えた。暫らく旭岳取付きの尾根で待つたが荷物も重いし、一刻も早く温泉に無事を知らせたく、一足先に温泉へ歸ることにした。松山温泉に下りたかと種々御心配をかけたが、騒がせずすんだ事が何より嬉しかつた。

十勝岳、大雪山間の冬期縦走は、北大山岳部を始め各山岳スキー團體に於て幾度か試みられ乍ら、未だ成功をしないそうだが、何人によつてなし遂げられるにしても、天候に恵まれた幸運兎でなければならぬ。

・裝備と食糧

この旬日近いピバークの間に於ける食糧、裝備その他の點に就き次に簡単に述べ、本稿の結びとする。

衣類は下着、毛のシャツ、チョッ

キ、毛糸のチョッキ、ワイシャツ、上衣、アノラック、着替としてシャツ一枚だけ、着下、手袋は履いてゐる外に豫備として各二足づつ。

雪穴では一番下に油紙を敷き、其の上に犬の毛皮一枚。最初の夜は上

尾瀬の問題

吉澤生

電力の國家管理といふ問題は昭和十二年頃から色々本格的な論議が行はれ、昭和十三年の第七十三議會で「電力管理法」外法律が通過した事は既に御承知の筈である。

所で逓信省は尾瀬ヶ原水力發電に對して如何なる計劃を持つてゐたかといふと

「只見川と利根川の水源たる尾瀬ヶ原（利根川の水源はどうかと思ふが）に高さ八十米突の大堰堤を築造し、尾瀬沼を一大貯水池たらしめ、その利用水深を三十米突として計畫すればその有効貯水量〇〇〇〇萬立方米突を得る。尾瀬ヶ原貯水池より至佛山麓に隧道を貫通し利根川畔に

衣のまゝ自製の寝袋に入り、其の上にアノラックをかけ、更に携帯用の薄い天幕を被ふたが、下が冷々して良く睡れなかつた。夜は寒氣の故もあり何時もうつら／＼の内に過した。次の夜からは上衣を脱ぎ上へ被

ふた。此の方が幾分身體が樂で良かった。四日目には氣温も下り、寒さを強く感じ着替のシャツを更に重ねて着た。

食糧としては宿からの握飯二ヶ。米一升。味噌百匁。蒔草少量。乾

發電所を設くるのであるが、之を二ヶ地點に計畫し有效落差合計〇〇〇米突を得る。更に利根川における藤原堰堤地點の選定並びに築造によつて、利根川の洪水を貯溜する事とし、此の貯溜した洪水は尾瀬ヶ原發電所に設置したポンプによつて尾瀬ヶ原貯水池まで汲み上げられる。此の實施によつて尾瀬ヶ原地點に於ける最大發電力〇〇萬キロワット、其の年發生電力量〇億萬キロワット時を得、渇水時の負荷對策にも活用され得る。」

といふ事になつてゐた。尾瀬と水力發電の問題については本會報に於ても既に述べられてゐるが、今度電氣廳の手によつて新たに又實地測量が行はれる事となり、十月中旬より一ヶ月に亘つて調査班が現地に出張、一先づ堰堤位置等の物理地下探

パン七ヶ。カステラ六ヶ。味付鱈十枚（袋入）。副食物として干芋五ヶ（袋入）。黍團子十本。鰯五枚。蜜柑七ヶ。ドロップス一罐。チョコレート五枚。ウキスキー一瓶。

食し、一時近く高根ヶ原に出てからは咽喉の乾く事夥しく、處々に出てゐる涸松に水の如く附いてゐる雪や吹き固められ或ひは波形又は鱗形の雪を剥ぎ取つて食すること幾十度。二時過ぎ忠別岳にさしかゝつて、殘査を行ふ事に決定した。之は群馬縣の奥利根發電計畫が今年度以後十ヶ年繼續事業として具體化されたのを機會として之と並行して行はれる様になつたものであつて、愈々尾瀬ヶ原も時代の脚光を浴びて、國策線上に浮び上つて來た譯であるが、吾々自然愛好者にとつては多少の感慨なきを得ない。公益優先、國防國家の完璧を期するためには統制も必要であらうし、或る程度の犠牲も亦止むを得ない。従つて私は尾瀬の危期を敢えて叫ぼうとはしないが尾瀬に關心を持つてゐる人々は其處が水底に沈まない内にせい／＼その風物を心の眼に焼き付けて置いた方がいゝと思ふ次第である。

（尙本文は十月十日附日刊工業新聞の記事を見ての感想である事を附け加へて置く）

のでコッヘルを取出し、バーナーに火を點じ、飯を炊くべく雪を融かし、湯に半分以上一氣に飲みほしてつたので、更に雪を融かして飯を炊き豚汁を作つた。要領も得なかつたが時々火も消え九時頃まで掛つて漸く食事を済ました。

翌日は朝は米飯に豚汁。昨夜揮發油でどうも思はしく出来なかつたので、今度はアルコールで炊いたが、具合良く雪を融かしても四十分位ですつかり出来た。晝食はカステラ。晩は又朝と同じく米飯にした。

三日目頃から節食する事に努め、なるべく辛いもの、鰯の様な物を少量で我慢する事にしたので、握飯は勿論温泉への歸り途残りの二ヶの蜜柑も全部食したが、他の食糧は全部多少にかゝはらず残すことが出来た。此の爲に人里離れた大雪山中、吹雪に閉ざれること一週間、前後を通じて九日間只一人幾分心に落着きを以て過し得たことを思へば、貴重そのものであらう。此の食糧も無くなり、更に吹雪が止まぬとしたり、その時の氣持は何んと云ひ得よう。不安を通り越して悲壯な覺悟を致さねばならなかつたであらう事を思へば、心からこの残りの食糧に對して感謝せずにはゐられなかつた。（了）

★トムラウシ山小屋の新設……本年十月トムラウシ山中腹東斜面の瓢箪池畔に、建坪七坪半、收容十人の避難小屋が新設された。（編者附記）

六時頃今宵を過す假の宿も出来た

イエフゲニイ・アポラーコフは小さい頃もうアルビニズムの學校を卒業してゐた。しかし彼の學校は、ソ聯の一般登山家のやうに、高架索の山々ではなかつた。彼の學校はその故郷に、シベリヤにあつた。一向高山らしい高山もないシベリヤにある。はじめから風變りな登山家であつた。

クラスノヤールスクの叔母さんのところで厄介になつてゐた。彫刻家になる勉強をしてゐたのである。やたらに山が好きで耐らなかつた。クラスノヤールスク山脈(山脈といふほどでもない國境線の背稜だ)をやつつけ

ソヴエト

一登山家の話

平 袋

やうと決心した。たゞそれは雲をいたゞくやうな高峰ではないとしても、すべ／＼した花崗岩の斷崖から出來てゐるので、或る程度の裝備と熟練とがないと、ちよつと登れない。

アポラーコフはまだ熟練を持つてゐなかつた。裝備もなかつた、といつた方がいゝ。例のゴム長靴のまゝで出かけた。ほんの目立たぬ手が／＼に裸の指をかけた。何度目かになつたとそれに成功した。再び前進した。また壁高の巖頭に立つた時には、さすがにへとへとになつたし、あちこち傷だらけになつてゐ

た。それでも目的を達したよろこびは何ものにも代へ難いものであつた。

かうしてアポラーコフはアルビニズム學校の第一課を修業した。だが、そんなことは彼自身以外に、世間の誰も認めはしなかつた。とはいふまでもない。ところが、やがて飛んでもない違つた方面から、この無名のクラスノヤールスク兒の噂が傳へられて來た。噂といつても、ほんの新聞の雜報欄の程度に過ぎなかつたが、ともかく、今迄まるで名前を聞かなかつた妙なアルビニストが、突如として處女峰を、しかも立て續けに三つまで征服した、といふのである。高架

索の中央に壁となつてゐるビジンギヤ山塊の未踏の懸崖、ゲストルウ(四八六〇米)、カトッイン・タウ(四九六八米)、ジャンギ・タウ(五〇五〇米)の三峰である。

アポラーコフはこれで自分の心臓の強さ、たしかめられたと思つた。一九三三年三月、彼はメスチャ入りの大縦走に出發した。メスチャといへば、スワネチャ州の首都で、一年の半分は完全に他の世界から隔離されてゐる別天地である。三月はまだ氷雪の中にあつてほとんど人を寄せつけない。交通は七月になつてやつと始るといつた有様である。アポラーコフの加つたスキー隊はアドゥイル・スウの峽谷を發し、メスチャ峠を越へてスワネチ

ヤに入り、そこから更にベチ・峠を廻つてカバルデノ・バルカリヤに歸る豫定であつた。〔「ケルン」第四九號「ソヴエトの山々」の概念圖参照。〕

峠には刺すやうな氷の風が吹いてゐた。厚い雪の表面はテラ／＼である。一行は岩蔭を求めて足を早めた。岩蔭で僅かに息をつき、生氣を取戻した。アポラーコフは一行中の最年少者アンドレイ・マレイノフの直ぐ後に従つてゐた。不意にアポラーコフはこの青年の姿を見失つた。あだかも透明な山の空氣の中に不意に彼が溶け込んでしまつたかのやうに。

アポラーコフはさういふ山の「奇蹟」の正體を知つてゐた。山岳スキーを待ち構へてゐる危険な深いおとし穴なのだ。彼は割目の端に馳けよつた。割目の中は暗く、しーんと静まつてゐる。彼は踢んで聲をかけた。何處か遙かの下の方にぶい反響が聞けた。それはこだまであらうか、それともまた友達が生きてゐるしるしを與へたのでもあらうか。

一隊はみな割目の端に集つた。アポラーコフはザイルにすがつて下りて行つた。彼は深い雪の底で冷たくなつてゐるマレイノフを見つけた。しかし雪の枕が若いスキーヤーの命を救つた。烈しい痛みを訴へたが、傷はどこにもなかつた。アポラーコフは大へんな努力で彼を自由にし、スキーも掘出して、上に合圖した……

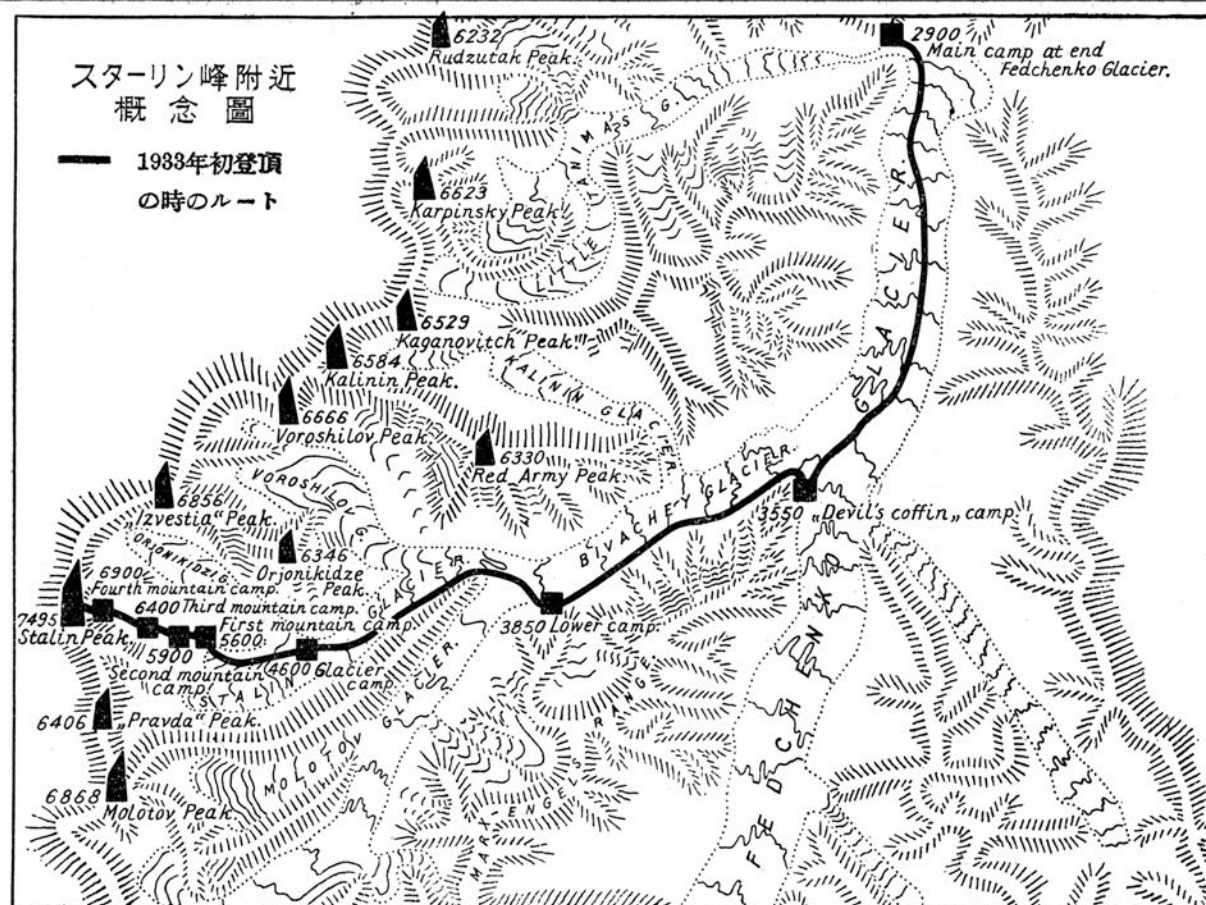
この大旅行が終ると、息づく間もなく、アポラーコフはまた山に向つた。エリブルースへ！エリブルースの冬季登攀は優れたアルビニストの大きな誘惑である。上半部が完全に厚い氷で覆はれてゐるエリブルースへの道は、おそらくメスチャへの道にも増する困難があるに違ひない。彼は氷の斜面で滑つた。割目にも落ち込んだ。不思議に命が助かると、またもや上へと攀登つた。氷に穴を穿ち、寢袋に匍ひ込み、友達のために自分の體温で暖めた。時には友達のために自分の食物を減らすこともあつた。だが初めの目的に向つては少しの容赦もなかつた。彼は前進した。五九四五米の絶頂に到るまで。他日の一層大きな決定的な登攀に備へて。

決定的な登攀の機會は早くも同年(一九三三年)の夏に與へられた。政府は選れたアルビニスト達にソ聯最高峰スターリン峰、七四九五米の絶頂に足跡を印すことを頼んだ。そこに自働氣象觀測ラヂオ裝置を据附けることが使命であつた。

雄大なフエドチニコ氷河(長さ七七キロ)の末端二九〇〇米を根據地とし、この氷河を溯り、その支流を進み、オルジョニキーゼ峰(六三三六米)直下のオルジョニキーゼ氷河の上に、四六〇〇米の地點にベースキャンプを作るまでは大してむづかしい行程でもなかつた。それからさがむづかしかつた。アポラーコフの一行はベースキャンプに一ヶ月餘

スターリン峰附近 概念圖

1933年初登頂
の時のルート



りも滞留を餘儀なくされた。高山の自然現象が勝手氣儘に荒れ狂った。落石の轟音がキムプの住人達をほとんどつんぼにした。猛烈な風雪があまりたくさんもない住人達の財産を奪ひ去つた。そんな中で、ほんの少しのおだやかな間を計つて、アボラーコフ達は頂上への進撃を怠らなかつた。

前進キムプの第一は五六〇〇米に築かれた。これは大體エリブルースの高さである。つひ數ヶ月前アボラーコフの目的であつたこの高さも、今はほんの最初の段階でしかない。今は、目的は六つの巨大なジャンダルムを越へての前進にある。垂直の巖稜が雲の上遙かに、まるで青空をちかに突いてゐるやうにさへ見える。

過ぎし日のクラスノヤールスクの岩登りの鍛錬が今こそ適切に役立つた。彼はまづ最もむづかしい五つのジャンダルムを乗越へ、相手のグーシチンと共に前進した。第二キムプ五九〇〇米、第三キムプ六四〇〇米……山や岩に充分に馴れたバミールの山人達が二人に従つた。例のラヂオ装置や食糧などを擔ぎ上げたのである。だがこゝでこの連中は匙を投げた。あまりにも物凄い岩に驚いて、荷を置いて去つた。アボラーコフとグーシチンとは自分で荷を背負はねばならぬ。二人は重い荷に喘ぎながら進んだ。

アボラーコフも置くことがある。彼は頭いた、そして大きな石を蹴つた。石は岩塊をも

ぎ取りながら轉落し、二人をつないだザイルを斷ち切り、グーシチンの掌を打つた。頑丈なグーシチンの腕は突差に岩に吸ひついた。アボラーコフは仲間間に馳け寄つた。彼は素早くザイルの両端を結び合せ、グーシチンの傷付いた手に綱帶を施し、名狀出来ない複雑な表情で友達をみた。

——下らんか、それは退却であり、登頂の斷念を意味する。一人での前進もまた出来ない相談だ。グーシチンにはそれがよく分つてゐた。彼はしばらく呼吸をととのへた。それから血潮で染つた腕を伸して、アボラーコフの後に續いた。約三三キロの荷を背負つたままで。

かうしてラヂオ装置は六八五〇米の岩上に据付けられた。最後の第四キムプは六九〇〇米に置かれた。

アボラーコフはこゝで三晝夜の間、ほそぼそと暮した。小麦のひきわり粥が匙に五、六杯堅パン二ヶ、お茶——それだけが一日の食事であつた。グーシチンは可成りの血液を失つて弱つてゐた。彼は絶頂を眼の前にして引返へさざるを得なかつた。アリストフその他の仲間が登つて來た。

假に六千數百米の高さにある人間の自覺症といふものを認めることが出来ると思はばアボラーコフは自分の状態が決して悪いものではないと感じてゐた。しかしこの高さでは氣壓は地上の半分に下り、衰弱、知覺鈍麻、

頭痛などが一流のスポーツマンをも征服し、ほんの一舉手一投足にも莫大な力が要る、といはれてゐる。學者の實驗によると、この高さで靴をはき、その紐を結ぶに要するエネルギーは、地上で樵夫が一立方メートルのマキを割るエネルギーよりも大きいといふ。ところがアボラーコフは單に「靴の紐を結んだ」ばかりではなかつた。九月二日の夜、雪風が來て二つの天幕を埋めつくしてしまつた時、彼はまるでモグラみたいに雪の中にもぐり、コッヘルを蓋などを働かして、仲間達を掘出す、といふやうな大仕事をやつた。零下四五度の身を切るやうな風雪の中でゝある。さすがにもの言ふ氣力もなくなるほどに疲れた。が、彼はやがて前進を開始した。九月三日の朝は輝かしい太陽を迎へたからである。

九月三日、アボラーコフはゴルブノーフと相助け合ひつゝ、ひたすらに頂上へ頂上へと最後の努力を傾けた。氣がつくと、はや日没が迫つてゐる。黄昏が匍ひ上り、それが雪を混へた烈風を運び上げる。頑強なアルビニストも、頂上の直ぐ手前ですでに全く力盡きたやうにみへた。この雪風から身をかくす場所を求め、少し身體を温め、力を回復させねばならぬ。さうして自然の狂暴な力との人間のほんたうの決闘を試みねばならぬ。だがそのやうな救ひの手が七四〇〇米の山稜の何處に期待出来るか。ほんの毛ほども臆する心が生じ、氣落ちするとしたならば——彼は永遠に

こゝで眠らなければならぬだらう。アボラーコフは執拗に攀ち登り續けた。

最後の急斜面である。もはや手に負へぬほどの急角度ではない。だが一步の登りは文字通りの決闘である。小さな凹地に思はず彼は崩折れた。息をついた。起上らうと努力した。起上ることが出来ない。彼は匍つた。匍つたまゝでついに頂上に到つた。文字通り匍ひ上つたのである。スターリン峰の絶頂に登頂することに成功したのである。

つひに目的を達した！ その意識が彼に力と呼戻した。祖國の最高峰に人類最初の足跡を印した。その力がリクザックの中からスケッチ帖を取り出させた。彼は鉛筆を振つて若干のスケッチを描き止めた——言葉では到底傳へ得ないバミールの偉大な氷雪の波瀾の印象である。

その偉大な印象は、今、國家の功勞者として、優れたアルビニスト・スポーツマンとして、彼の胸間を飾る多くの勳章に偲ぶことが出来る。だが、すでに最高峰を極めた人間はこれから何をしたらいいのだらう？ 何處にその前進路を求めるのだらう？ アボラーコフにとつては答は簡單明瞭であつた。彼は第二、第三の登攀をやつた。さらに、まだ人間を一度も寄せつけない天山々脈の盟主ハン・テングリがある。ハン・テングリ、それは蒙古語で「魂の主」を意味し、これまで幾度か登頂が傳へられたが、さて頂上にのぼり着く

と、まだそのさきに、より高い峰頭が現れるといつた調子で、今日までもまだ完全な登頂が行はれてゐないといふ不思議な山——そこに彼は行き、その最高峰を極めるかも知れない。さらにまだ何人にも知られてゐない峰や谷、その探究が國家に貴重な發見をもたらすといふ——そこにも彼は行き、それを見出すであらう。さらにさらに、この廣大な領土にはまだ無數の祕密の道がある。アボラーコフはきつとそれ等の道を行くに違ひない。そして彼らに續いて、力強い、辛棒強い、勇敢で疲れを知らぬソヴエト・スポーツマンが行くのである。

× × ×

本文は一九四〇年六月二十八日の「ウェチエルニヤ・モスクワ」紙所載「勇氣と忍耐の人々」より取つた。すべてのエク

スベデションが科學的組織的に行はれてゐるのに、一般に發表される記事がその反對に、記録的に科學的でないのは可笑しいことだといつも思つてゐる。

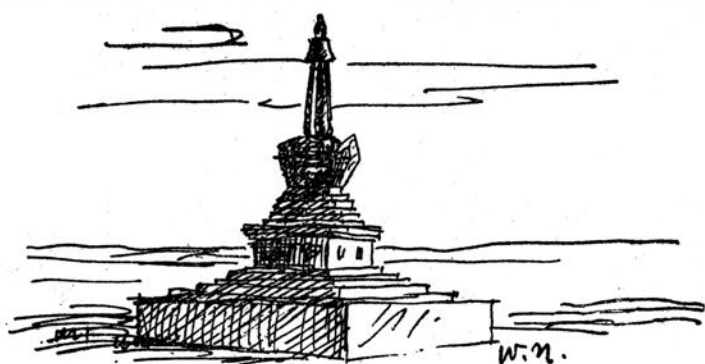
一九四〇年には天山方面に二つのエクスベデション



(スターリン峰にて)

が出てゐる。一は、ソ聯翰林院地理學部會のそれで、同會員、かつ功勞スポーツマンで一流のアルビニスト、エム・テ・ボグレベツキイが隊長となつてゐる。第十回目の遠征である。もう一つは、ソ聯翰林院地理學研究所とカザフスタン支部との協同遠征でグリゴリーエフ教授が隊長である。前者はハン・テングリを中心に、イヌイルチュク、コク・シャヤリ、サルイジャス三山による未踏の三角地帯の登攀探險を主目的とし、後者は山麓一帯の不斷の脅威たる天山々脈の凄まじい落石の研究を主眼としてゐる。

六月にはソ聯翰林院地球物理學研究室の第七回遠征隊が、ウェクスレル教授を主班として例のエリブルースに登つた。研究員七〇名



★★ 内蒙紀行 ★★

名須川 渡

といふ大掛りなものである。

夏には、モスクワの「スタルト」スポーツ

協會からアントノフ以下六名が高架索に赴き

オートバイで、軍用オセチヤ道路、スワネチ

ヤ、メスチャ（三八〇〇米の萬年雪の峠、ラ

トバルスキ峠越へ）、三二〇〇米のザケール

峠越へ、ゴリー、ツピリシ（昔のチフリ

市）、オルジョニキーゼ市といふ一九五〇キロの走破を行つた。

また女性で初めてエリブルースのスキー登

山を試みて成功した話もある。モスクワ高等

美術學校の女生徒でガリナ・タエーリナが

スキーで（アイゼンを用ひないで）エリブル

ース東峰（五六九五米）に到り、しかも本會

かねて一度は行つて見たいと思つてゐた内蒙古の一部を旅行する機会を得たので、簡単にその見聞を書いて御送りすることにした。

内蒙古が最も美しい時季は盛夏であると聞いてゐたが色々事情の爲、この地方としては夏も、かなり過ぎた九月の上旬の旅行である。そして自分勝手に計畫したものでなくお上の命により行動したもので〇〇から張家口——西スニット——東阿巴哈爾といふコースを往復したのである。東スニットにも寄つては見たが、この全経路は別に珍しくもなく既に色々の團體によつて、様子が明にされてゐる様である。

便利のいゝ所を歩いたのであるから裝備等は到つて簡單で、冬物毛布天幕一張を持参したに過ぎない。天幕等、必ずしもなくても困らなかつた。食料も米以外、副食として罐詰、野菜類、菓子等少量を身のまはりのものと一緒にトラック三つと風呂敷包に入れて行つ

報八〇號で報じた例の四二三七米地點の豪華なホテルまで、他の男の連中より三時間早く

到着したといふ。もつとも彼女はスキーの滑

降選手權保持者であり、ジャムブでも女子最

高記録を出して居り、全聯邦職業組合スキー

部からはスラロームの選手として出場すると

いふ名人だから、あたりまへの男では敵はな

た。可笑しなもので計畫的な身仕度用意で出かけないといふもビツタリ来ないものだが、今度の場合も所謂遠征等言つた感じはなく、單なるトラツク旅行と言ふ様なものであつた。然し蒙古の概観を味はふ事が出来たのは幸だつたと満足してゐる。

行程は相當に長く、往復約一五〇〇軒近くあつた。乗物は日産のトラツクによつたが僕等二名の外運轉手等が加つて行つた。日本人が一人も居らぬ所に泊つたことがあつたが、こんな二三軒の部落では水は不自由で、汚い水であり然も遠いことがあつた。蒙古人の燃料は牧牛の糞を干したのを焚くのだが之は仲々よく燃える。

萬里の長城外線の峠を越すと多少氣温も下り、何となく風物も違つて来るが漢人が多い丈けに支那氣分だがつた。峠を過ぎると漸く蒙古らしくなつて来る。鳥も見られなくなり一面の草原の起伏が続いて俗に蒙古樓なんかと言ふ變な名前の小さな草花が點々としてゐたりする。此の邊まで

いのも無理はなかつた。

……といったわけで色々とおもしろい話もあるにはあるけれども、どうもいづれも記録的に正確な記述が見當らないので、つひ紹介するのをおつくりになつてしまふ。會報百號の記念といふことで、何とか書いてみた次第である。

来なくても驚は到る處で見られるが、野鼠が自動車の前を頻りに横切る所もあつた。西スニットを過ぎると本當の蒙古氣分で灌木のまばらに生えてる荒蕪地、果てしのない草原、丘陵等が何十里と續いてゐるが其の廣さは流石と感心させられた。

時々湖沼があつたり又砂丘等も見られる。ひどくズンペラボウな風景であるが方向を示す爲に目星しい丘の頂には大抵オボがある。オボは石を積んだ道しるべで丁度ケルンの様なものだ。然し積石の上に木の小枝を挿し立て並べその中央に棒を一本立て之が十三箇位一列に並んでゐる大仕掛のものもある。勿論結構な指導標となる譯だが之は禮拜もするらしい。夜歩く時には何日もよく見える大空の星によつて方向を知るのだから。歸路東阿巴哈爾を朝四時、未だ眞暗の中に出發したが僕等も磁石等睨むよりは北斗七星でも眺めた方がすつと都合がよかつた。又蒙古の夜空は甚だ美しくもあつた。

蒙古人はラマ教を信じてゐるが遊

牧の民であるから殆んど固定した部落を持つてゐない。羊、山羊、馬、牛等と共に草を追つて自分等の居住である包を移動してゐるのである。

アーチツクテントを思はせるこの直徑一間半から二間の包の骨組は上下二つの部分から成り、上部は丁度カラ傘の様にすばめる事が出来、又下部の矢來の様に組んだ部分も運搬に便利な様に出来てゐる。そして之は自分で造るのではなく漢人の作つたものを買ふのださうである。

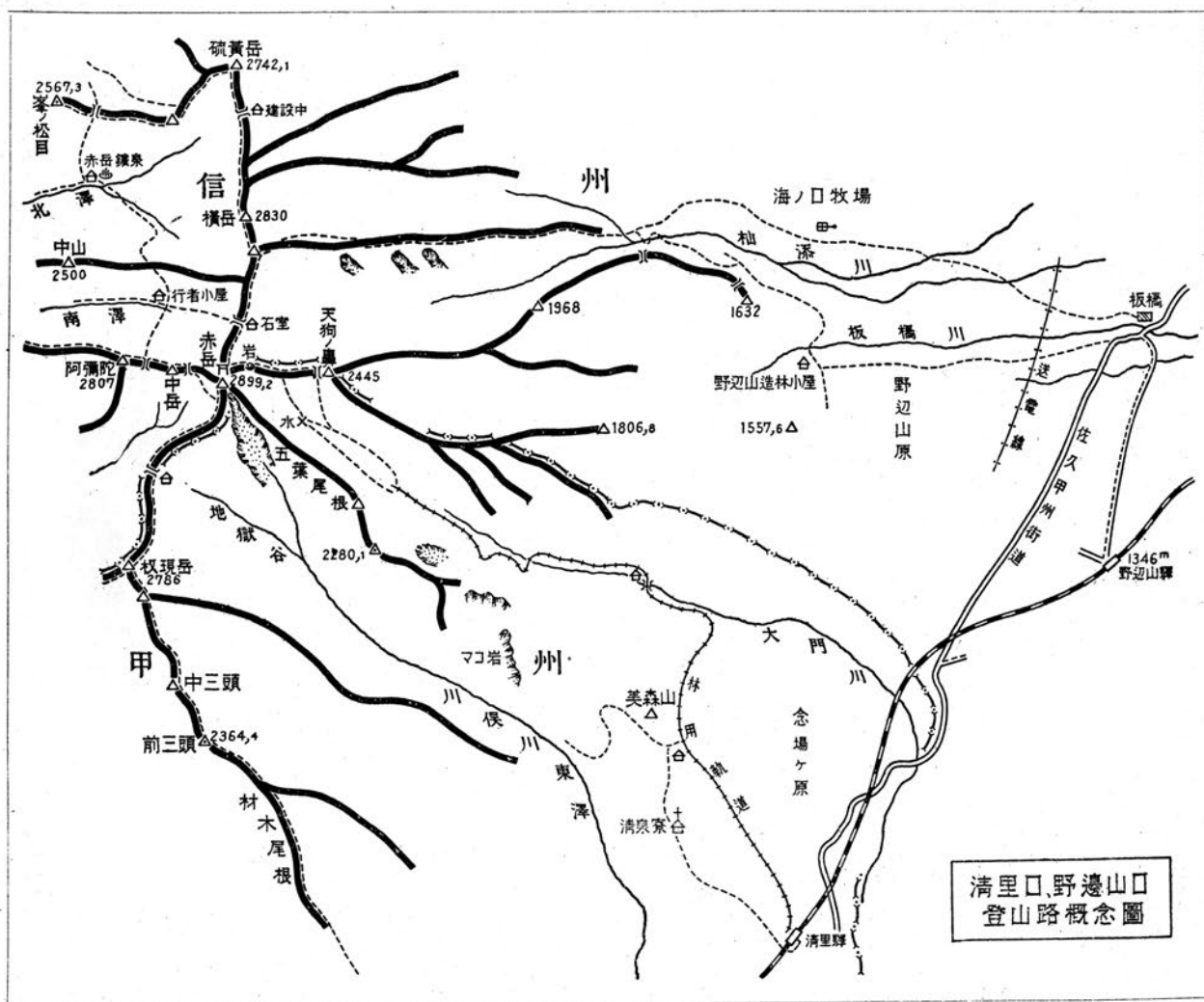
部落と稱すべきものもあるが之等は皆ラマ教の寺即ち廟（スム）が中心となり之に極めて少數の家が附屬してゐるに過ぎない、部落とはラマ寺を言ふものと思つても差支へなさうである。その廟の中には荒廢したものもあるが仲々壯大なものもある。東阿巴哈爾の如きは恐らく百萬圓位の價値のありさうな大建築で之を中心に住んでゐるラマ僧丈けでも八百人あるとか聞いた。何十里といふ遠方から不便な交通機關によつて運搬した材木等で、よくもこんな

ない。二十分程で最初の道松にぶつかつたが一寸下りになつて再び灌木帯となる。馬鹿に急な道になつたと思ふと一枚岩が二つ眼の上に出て來た。下のは右の端を樹につかまりながら登ればいゝが上の方は真中で左へ横切らねばならない。然し針金が一本下げてあるので大した事はない。若し之がなかつたら相當なものだ。子供など連れて行くにはザイル位は用意して置いた方がよい。

此の難場を過ぎると直ぐ道松帯を横切つて行く様になる。前方に横岳から石室の方面が見える。之から愈と最後の登りとなりラスト・ヘヴィで頂上のお宮の峯に直接出るのである。餘り休まなくとも清里驛からではたつぷり六時間はかゝるものと思つてよいようだ。

吾々はそれから南の三角點のある方の峯の風蔭で晝食をとり、一時出發、阿彌陀と中岳との鞍部から行者小屋に出で（此の小屋の周圍に關する限り陸測五萬は出鱈目である。小屋から中山の尾根を踏す所など地圖では二百米突も登る様になつてゐるが事實は二十米突もどうかと思ふ位だ）中山を踰して赤岳嶺泉には四時に著いた。私にとっては實に十五年振りの嶺泉で、建物は大部古びてゐたが四邊の様子は餘り變つてゐない様だつた。

翌日は七時十五分に嶺泉を出る。流石に二一〇〇米突の高度を持つてゐるので水が張つてゐる。材木落し



清里口、野邊山口
登山路概念圖

をやつてゐるので暫くやめて貰つて素早く潤澤を渡り峯の松目の東鞍部への道を登る。割合に急だが朝の元氣で一氣に鞍部に出た。約一時間。此處は餘り眺望がないが二、三分東へ登つた所にいゝ所があるから休むなら其處まで行くべきだらう。硫黄岳西南の地圖の岩峯（實際は岩峯に非ず）からの眺めもよろしい。素晴らしい天氣だつたので非常に遠望が利いた。寫眞を撮りなどしてゐたが硫黄の三角點には先の鞍部から一時間。危い所は一つもない。子供でも連れて来るには恰好の散歩道である。阿彌陀の直ぐ右に北岳が見え、それから甲斐駒、仙丈、中央アルプス、御岳、乗鞍、穂高、槍、遠く立山、剣、それから鹿島槍と實によく見えた。猫も四阿山も淺間も見える。煙はあがつてなかつた様だ。

硫黄から南へ下りた鞍部の東側に北牧觀光協會で石室を建設中なる事を發見する。冬使へる様にして呉れるといゝが。東西は素晴らしいスキー場となる可能性があるから。此の小屋の事は早速「山日記」の材料とする交番の様な殺風景な高山植物監視所を過ぎ針金や梯子のある所を通過して二八三〇米突の横岳の最高點に腰を下ろす。硫黄から約五十分である。

海ノ口方面への下山口は地圖の如く次の峯にある。トタン板にその旨書いてあるから間違へる氣遣ひはない。吾々は十一時半に此處を出た。道は地圖より稍と北側の山の斜面を

下つてゐる。二四四〇米突の小臺地からは尾根筋に戻る。此處の道傍の高みへ出ると赤岳の眺めがいゝ。此の道では眺望の利くのはこゝだけである。二十五分程休んで〇時十五分出發。約一時間にして（此の間道氣持ちよし）杣添川上流の右俣を渡つた。一寸下つた所に道標があつて「右野邊山に通ず、左海ノ口に通ず」とある。私は右をとつて見たが之は結果から見て餘り獎められない。矢張り左をとつて板橋へ出るのが本筋である。

吾々のとつた野邊山への道は殆んど歩かれてゐないらしく、橋も朽ち熊笹が蔽つてゐて山慣れない人にはわからないと思ふ。殆んどカンで歩くのである。結局杣添川を三度渡つて川の南斜面、地圖に岩塊の出でゐる尾根の北側を歩いて行く。分岐點から二十五分程でヒヨイと廣い道に出た。立札に「本澤・野邊山線」としてあつたから一種の防火線であらう。「横岳（五・五）科」といふ文字も見えた。場所は獨標一六三二米突の北側邊りと思ふ。直ぐ可なりな澤を立派な橋で渡り、先の見當がつかないでグン／＼スピードを出す。宛で八ヶ岳の裾を永久に廻つてゐる様に感じられる道。然し千曲川上流梓山方面、金峯方面の眺めは實によろしい。落葉松が又よい點景である。その内にグツと廻つて遂に板橋川へ出た。橋を渡ると小屋がある。眞新しいいゝ小屋だつた。「今日は」といふと二十位の娘さんが出て來た。聞けば白田營林署所屬の「野邊山造林小屋」といふのださうだ。之で又「山日記」の材料が一つ増へる（村

の字の北邊りと思ふ）落葉松の實が澤山乾してあつたので燃料にでもするのかもしれないと思つて見たら、之をまくと又松が出て來るのだとの事。成程と一つ割口になる。之から野邊山驛までの位でずかときくと一時間半位、今は二時二十五分、慌てる事はないので悠くりと出掛ける。

小屋から五分も行くと又立札があつて「野邊山・八ヶ岳線」清里驛に至る。「板橋四軒、海ノ口驛一軒」と書いてあつた。地圖を按ずるに此處から板橋——野邊山ではわざ／＼三角形の二邊を通る様なものであつたが、時間も充分あるし、下手をして汽車をのがしては皆に氣の毒なので急がば廻れを實踐する事とした。地圖の點線路よりは川に近く殆んど東向きである。野邊山原は實に雄大である。分岐點から五十分にして送電線の下を通過。西北の原の高みに日の丸の旗を高々と立てた可なり大きな家が見えてゐた。原の終つた所で暫らく腰を下ろしてから森を通つて直ぐ佐久甲州街道に出で板橋の部落に這入る。此處から野邊山の驛までは丁度三十分、一直線の道である。上りの汽車が來る迄にはまだ二十二分残つてゐた。汽車の中で丁度南佐久中込の親戚の法事に行つた母に偶然あつて超満員の汽車と一緒に東京へ歸へる。可なりに充實した二日の旅であつたがあの汽車の事を考へると一寸嫌な氣持になる。女ハイカーなどがバットをふかしてゐる圖なんか見せられると登山者の實の低下も止むを得ないと思ふ。汽車のすいてゐた昔の山行を偲ぶやせつなものがあつた。（終）



秋の神河内より

大瀧山へ

吉田 竹志

十月十一日夜新宿發、行程は松本島々、神河内、德澤、大瀧山、大クダレ澤、東澤、穂高驛。

飾りのない北アルプスを眺めようと思つて出かけたが、天は幸ひにもその望みをかなえて呉れた。

十二日大正池畔に車から下り立つた時の穂高連峰は、一切の色彩と纏衣とをかなぐり捨てた岩の殿堂だ。新雪の輝きのないのが物足りない。併し岳の骨を表し空高く聳ゆる壯觀は、何處見ても飽きるものがない、懐しい山の姿である。

十三日、午前七時廿分出發、ウェストン翁に敬意を表し、三時間程して德澤小屋に着いた。少時休息の後高原の眞中を通り抜け、林の中へ入り、長い登りを續けたが、樞松が見えだすと間もなく大瀧山の最高點に立つた。それから下り、小屋へ入つたのが午後三時廿分であつた。

小屋の一寸南方の小突起に此の山の三角點が在つて、樞松、石楠花、

コケモ、等の高山植物、その傍に御宮がチョコナンとましまして天照皇大神様を奉る。破片岩の散らばつた頂で一丈眺望の良い所だ。

十四日 昨夜から降り出した雨も漸く止むので、午後〇時十分小屋を立てて頂上に登り、指導標の所へ出ると、路は東方へ急に下り

になつて行く。懸て樞松帯が終り針葉樹林に入つた。主なるものは青森トマツ、シラビ、トウヒ、コメツ

ガ、ダケカンパなどである。二一九〇米の八丁池附近は森林美が非常に

立派であつた。徑は此所で二つになり、眞つすぐのは本道で、鍋冠山を

越へてゆく。吾々は別れて左へ入つて行つた。池の平が急に下りになる

と、追々に潤葉樹が多くなり美しい紅葉の世界になつて來た。

徑が大クダレ澤に添ふやうになると、兩岸の山は高く五色に染り、谷は益々深く水烟を上げて雄渾なる流れを見せ、規模も雄大なのでこゝまで來た甲斐があつたものと喜びに溢れた。

大クダレ澤が東澤となつて、何時の間にか本流の本澤に徑が添ふやうになり、暫く行くと右岸の大水澤が三段の瀧となつて本流に落ち込むのであるのを見たが、高さは二十米位で中々美事であつた。

須佐渡の茶店で三人の友と別れ、今夜の泊り宿、穂高村の寺島家へ案内人と共に歩いて、日暮六時半頃そこへ着くことが出來た。

「山岳」第三十五年第二號

・行爲と冒險 伊藤秀五郎

・ミニヤ・ゴンカ山群 望月 達夫

・千丈澤を繞る山々 法政山岳部

・綜説高所に於ける總代謝に就て 額田 敏

・平ヶ岳を繞る澤に就いて 中村 謙

・白馬三山と其の以北 盛岡英治郎

・春の白馬頂上より糸魚川へ 同 人

・三月の北ノ又 田中 實

・尾瀬の問題 川崎 隆章

・追悼記 辻本滿九君逝く 木暮理太郎

・我が山の友辻本君 武田 久吉

・小森宮章正君を偲ぶ 金山淳二

・會務報告 (以上約二百三十頁)

「山岳」三十五年二號の内容は右の通り決定致しました。擔當者藤島理事が外地出張の爲、私が編輯を引受けることとなり、色々な都合で豫定より遅れましたことを御詫びします。比較的豊富な内容を集め得ましたことは、藤島氏の勞を多とせねばなりません。尙京大旅行部の内蒙古と大阪商大の鴨綠江源流の二つは監督官廳等の關係で次號にまはすの餘儀なきに至りました。何卒御諒承下さい。本號は明年一月上旬會員諸氏の御手許にお届け出来る豫定です（吉澤）



紹介書圖

ARCTIC and ANTARCTIC

The Technique of Polar

Travel

Colin Bertram 著

(一二五頁)

極地探検ではあるが、そこには大いに山の遠征と相通するものがあり興味深く且有益な本である。

先づ極地探検の目的より書き起し『極地とは要するに寒さの國』であるとなして、總ての對策をこの寒さから出發させてゐる。

山と特に關係の深いのは、探検用の衣服、幕營、食料の各章で、夫々その根本原理と、發達の歴史を述べた後、現在使用のものの得失を論じてゐる。何れも極地での生活の描寫と並行して語られてゐるので、目の

當りで説明された様な生き生きとした印象がある。隨所にうがつた描寫があり、我々の體驗にもあることなので大いに共鳴すると共に、又教へられる所も多々ある。

最後に極地に探検隊を派遣して成功するには、之等裝備の完全なる事は勿論であるが、更に一層、隊員の精神的な準備と、よき隊長が必要であると力説して結んでゐる。

廿四枚の寫眞と共に各所に挿入されたカットも仲々趣味のあるもので面白い。

最近南極の事が新聞紙上にもよく載つてゐる様であるが、さうした意味でなくとも、一讀に値する。山に ついてもこの様な見方をした本がほしいものである。(吉阪)

リニツクサツク 九號

昭和十五年九月 早大山岳部發
行 四六倍版八〇頁

久し振りで早大山岳部の部報を手にして、思ひついたらまゝに感想を述べてみる。

懐古趣味を持ち出すわけではないが、私は早大山岳部の古い部報を、曾て愛讀しそれに啓蒙された一人である。あの三、四、五號當時の早期部員、言ひ換へれば近世アルピニズムに於ける輝かしいバイオオニヤ達によつてのものとされた、そして當時の社會狀勢の反映であるロマンティズムの色濃いこの學校の部報には、私

自身もかなりの影響を受けたし、懐しいものにも思つてゐた。従つて頁を開けるまではたゞ漠然とさうしたものを豫想してゐた。

ところが、今度出た九號は、その體裁と言ひ内容と言ひ、全く趣を一變してしまつた。正に鮮な轉換である。かうなると世に謂ふ傳統などといふものが、案外ソフトなものゝやうにも思はれたりする。しかし、このことは私が九號を瞥見しただけの皮相的な感じであつて、本來のこの部にはこの部としての昔からの傳統が、いままは燃え續けてゐるのかも知れない。或は體育會所屬といふことを強く自覺した爲か、又は從來の公刊報告に對して、非賣品の部内報告になつたことによる内容の性格から来る違ひでもあらう。

主なる内容は、登攀行動に關するものと、ヒマラヤの研究とに分れ、後者に對し全數の約三分ノ二に及ぶ頁數が與へられてゐるのは見逃せないことの一つであらう。

行動は、「山岳」三十四年第一號に報告した臺灣遠征に於る、二三の補遺的なものと、谷川岳及カクネ里の合宿、南アルプスの集團縦走、神ノ田圓合宿と、年度別による明神岳東稜の登攀報告であるが、登攀の主要な報告は既に「山岳」や新聞に發表済みな爲、何れも簡単な感想程度に止まつてゐるのが、部外者からみると何か中途半端な記事のやうに思はれ、重複してもやはり一應の態型を

整へてあたりかつた。

巻頭の「遠征といふことに就いて」の小文中述べられた二三のことは背筋に價すべきことであつて、外地遠征を意義づける上に大いに同感の意を表したい。

ヒマラヤに關する項のうち、吉阪氏のは西歐諸國のヒマラヤ登攀の歴史を鳥瞰圖式に要領よく纏められたもので、本文ではフレッシュファイールド、パウエル、ディレンフルト、グーテンなどの活躍を年次的に述べ今後も續行される豫定らしい。之れは後進者へのよきテキストとなる。別に藍田氏はナンガバルバットのみを詳説してゐる。

ベヒートルの「ドイチチェ・アム・ナンガバルバット」一九三四年の全譯と、これを譯すに至つた動機と經過に就いて譯者關根氏の一文があり、更にヒマラヤン・ジャーナル掲載の該遠征の日記が加えられてある。ベヒートルの原著は英譯本によつたものである。翻譯技術上のことは兎も角として、既に出版された例の小池新二氏のものなどと同じ頃に、この譯が完成されてゐたといふ。斯かる熱心な結晶が早く實を結んで、海老茶のベナントが海を渡つて前進することを期待して止まない。

最後に甚だしく誤植の多いことは遺憾であつた。また氣壓とボイリン・グ・ポイントが載つてゐるが、この表があると、高度計がなくとも山で大體の高さを知ることが出來て便利

であり、本年度から山日記にも同じやうな表が新たに載るやうになつたことを附記してをく。(織内記)

臺灣山岳 第十一號

昭和十五年八月 臺灣山岳會發行

周知の通り臺灣の山々は、本州の山々と比べてまだ「未知未踏の地域が多い爲めか、本誌の内容も興味深い紀行文に満たされてゐる。

巻頭の沼井鐵太郎氏の書かれた「臺灣山岳未踏への想片」は、嘗て同氏が「山岳・三四ノ二」にもされた「臺灣登山小史」の姉妹篇で、簡單ではあるが臺灣の山々の未知の地域を窺ふことが出来るものである。内地の若い人々も臺灣に憧れる者が多いので、慫慂した示唆に富む文章は是非今後何等かの形で發表されんことを期待したい。

編輯方法は割合に雜然としていて餘り感心は出來ず、又時節柄望むことも無理かと思ふが、寫眞は見ると可きものが餘りないやうである。

附録に收められた「臺灣山岳參考圖表」は面白い試みで、概念圖と共に利用價值大なるものがあると思はれる。菊版一六八頁。(望月記)

購入圖書

回教圖要圖 回教研究所編
西藏・過去と現在 (チャールス・ペル著、田中一呂譯) 生活社刊
富士山 (岡田紅陽著) アルス刊



會員通信

松本から高山(久々野)へ

田邊主計

十月中旬四日間、田舎道や峠を松本から高山線久々野驛まで左記の通り、途中三泊地圖をたよりに一人で氣樂に歩いて來ました。

十月十五日(昭和十五年)。鳥々から寄合渡まで乗合自動車。野麥へ向つて一里行つた處の川浦から左へ入り月夜澤峠(一七〇七米)を越して末川の恩木まで。馬頭觀音の下窓から御岳の見える宿屋に泊る。

十六日。恩木、把ノ澤、下向、關屋峠、留野原、日和田。ずつと御岳を左に見て、靜かで美しい景色の中を行く。

次の日(十七日)は五十三峠を越して胡桃島へ出たいと思つてゐたが恩木で、そこへ行く谷あい一面にオサムシの大群がゐる時があるときかされて恐れをなし、上ヶ洞へ出る。

そこから自動車の便があるときいてゐたが朝一回きり、しかも、あいにく途中に貨物自動車の顛覆して道を塞ぎ翌日もどうか解らぬといふので街道を中洞まで歩いて行つたが、その先歩くのが嫌になり、街道を離れて左へ入り權現峠を越して小瀬洞に泊る。

十八日。小瀬洞から街道の淺井へ出て久々野の乗合自動車に乗る。久々野發九時三十分、岐阜から三九六軒に七時間十六分かかる急行列車に乗つてその夜九時前に歸宅。

× × × × ×

月夜澤峠から恩木へ降りて行くところ牧場になつてゐる山の中腹を馬が獨りて馳けて行くのが見えたりする。今は緑、赤、黄色をそれらの濃淡の色に山々は美しい。やがて子供の遊び興じてゐる高い聲がきこえて里の近い事を告げる。御岳の方で遠く雷が鳴り出したが、間もなく頭の上でゴロ／＼鳴り出し雨は沛然と降つて來た。農家の軒下でしばらく雨宿りをする。雷の音が遠ざかると共に雨も通り過ぎてしまふ。この邊は馬の多い所で、路の兩側や畑の境にも木の柵が續いてゐて美しい風景である。しかし、何かに忿怒を抱いてゐる人は、斯様なおだやかな景色よりも寧ろ荒涼とした刺すやうな景色によつて慰められるかと思ふ。

× × × × ×

日和田も初めて行つたが美しい山村である。たゞし、はじめに村の人

にきいて行つた宿屋は妙な家であつた。もう暗くなつてゐたが、入口を開けて「こちらは宿屋ですか」ときくと中で酒を呑んでゐる男が、いき

「白樺ヒュッテ」の公開

東京文理科大学 山岳部
東京高等師範學校

上越國境の山々を登られた人々に親しまれ、且つなくてはならなかつた東鐵武能小屋が、本年正月雪崩に襲はれ見るも無慘に倒壊しました。

東京文理科大学・東京高等師範學校山岳部は、萬難を排し、此處に白樺ヒュッテを一般に公開し、以つて上越連峰を志す同好の人々の便を計り度いと思ひますから、左記諸注意御熟讀の上御活用下さい。

* * *

一、番人は居りませぬ。

二、備品、炊事具、寝具、ストーブ

三、許可、使用者は必ず前以つて當部に届出下さい。許可證無き人は絶対に使用を禁じます。

四、使用料 一人一泊六十錢
當部へ前納願ひます。

なり大きな聲で「誰だ」と言ふ。さて何のなにがしと名のりをあげても解るまいと思つてゐると、重ねて、「どこから來た」とときく。恩木、古

屋敷の方から來ました」と町事に言ふと「一人か」と言つて、ちよつと間をおき、傍の女に「氣の毒だ、泊めてやれ」と言ふのである。これは

五、部員合宿中は使用をお断りする事もあると思ひます。その時は悪しからず御許し下さい。當部の合宿は大體左の通りです。

1、二月中旬

2、三月十日—四月十日

3、六月上旬

4、七月下旬

5、九月上旬

6、十月中旬

7、十二月十五日—一月十日

尚部員合宿中は自炊をお断りし、辨當附きで一泊二圓戴きます。

六、錠は湯槍曾本旅館、土合山の家に保管してあります。

七、管理人が無斷侵入者發見の場合、それ相當の處置を取ります。

八、問合はせは左記へ願ひます

東京市小石川區大塚窪町

東京高等師範學校寄宿舎、桐花寮内

東京文理科大学山岳部
以上

田舎言葉と土地の習慣とかいふものよりも不適なものに思へたので、私は改めて「宿屋ときいて來ましたが、間違へまして失禮しました」と

言つてそこを出た。こんな家に思ひきせられて泊るよりも野宿をした方がよらしい。通りがかりの人にきくと今の家は宿屋ですよといふのである。「何か泊めたくないやうな様子でしたが」「イヤ役人かエライ人だと泊めなすよ」。

四、五町先にあるときいた宿屋は全くの農家であつたが、老婆とおかみさんとが親切にしてくれた。私も婆さんに葛湯の御馳走をしたりした。

いま田舎では人数だけしか米の配給を受けてゐない家があり、手持ちに不安を感じてゐるから、假令、人を泊める家でも数人で來られては困ることもあると思ふ。一人で歩くにしても數回の食料を用心のため持参してゐれば先々でいちいち厄介にならないでも済む。

廣東より 藤島敏男

東京を後にした翌日のひるこゝに着いて、爾來旬日に近い日を、今年二度目の夏の暑さに辟易して、それに見るほどの所もない街であつてみれば、結局宿の部屋に籠つて、旅先に購めた翻譯物の小説などを耽讀して暮すといふやうな仕儀になる。

目的のハノイへゆけば、なにほどのかの異國風物にも接し得られやうものを、こゝではたゞ騒がしい支那人の生活力に驚歎するのみである。

市街のはづれとほく赤茶けた丘陵が眺められて、それがまた十月なか